

高梨氏館跡

発掘調査報告書

1993. 3

長野県中野市教育委員会

高梨氏館跡

——発掘調査報告書——

1993. 3

長野県中野市教育委員会



高梨氏館跡全景

刊行にあたって

高梨氏館跡は東方に控える鴨ヶ嶽の山城跡とともに、戦国時代に活躍した北信地方の有力な武士高梨氏の全盛期に残された遺跡であり、この地方の戦国時代の歴史を語るうえで欠かすことのできない貴重な歴史的遺産であります。

この高梨氏館跡は壊されることもなく、今日まで往時の姿をとどめ、昭和44年に県史跡に指定されています。全国的にも希有な例であると言われるほど、極めて良好な状態で保存されてきたのは、郷土を愛する多くの人々の努力によるものであります。特に、歴代の高梨家の皆様の努力は特筆されるべきであると考えます。

ところでこの度、大切に保存してきた高梨家にかわって、中野市が保存・管理していくことになり、都市計画法に基づく近隣公園「高梨氏館跡公園」として整備されることになりました。公園整備にあたっては、遺跡の保存を優先させ、昔の面影を出来る限り再現することとなりました。

今回の調査は公園整備に先だって、遺跡の様子を明らかにし保存していくための資料を得る目的で実施しました。結果、皆様のご協力により多くの成果をあげることができました。本報告書はその結果を報告するものであります。

本報告書が高梨氏城跡保存の一助となり、さらに、郷土の歴史について、より一層の理解と関心を市民の皆様に深めていただく機会になれば幸いと考えます。

最後になりましたが、指導・助言をいただいた高梨館跡公園整備専門委員の諸先生、国立奈良文化財研究所の諸先生、および発掘調査団長金井汲次先生をはじめとする調査団の皆様、ご協力いただいた多くの市民の皆様、本書を監修をしていただいた湯本軍一先生に厚くお礼申しあげて刊行のあいさついたします。

平成5年3月

中野市教育委員会
教育長 鳴田春三

例　　言

1. 本報告書は都市計画法に基づいて整備される近隣公園「高梨館跡公園」整備に先立ち、埋蔵文化財の保存と活用を図る目的で実施された発掘調査報告書である。
2. 「高梨館跡公園」予定地は長野県中野市大字中野字小館に位置し、「高梨氏城跡」として昭和44年、県史跡に指定されている。
3. 調査は中野市教育委員会が調査団を編成し、昭和61年度から平成4年度にかけて実施した。
4. 本調査報告書は檀原長則・中島庄一・藤沢高広・徳竹雅之が執筆し、湯本軍一が監修した。
5. 本調査報告書の編集は主に関孝一・中島庄一・徳竹雅之が担当した。
6. 執筆担当者名は文末に記した。
7. すでに中野市教育委員会は、本館跡の調査概報を3冊刊行している。
8. 発掘調査及び整理作業では次の機関、方々から指導・助言を賜った。
長野県埋蔵文化財センター中野調査事務所
赤塙仁志・竹内一徳・鶴田典昭
9. 遺構平面図は上方が北に統一した。やむをえず、北を上方にできないものについてば図示してある。

目 次

刊行にあたって

例 言

第1章 はじめに	1
第1節 調査の動機	1
第2節 調査体制	1
第3節 調査の経過	2
1. 昭和62年度の調査	2
2. 昭和63年度の調査	2
3. 平成元年度の調査	3
4. 平成2年度の調査	3
5. 平成3年度の調査	3
6. 平成4年度の調査	3
第2章 環境と現状	4
第1節 位置と立地	5
1. 位 置	5
2. 立 地	6
3. 高梨氏館跡の周辺	6
第2節 城館跡の現状	8
1. 調査前の状況	8
2. 鴨ヶ嶺城跡	9
第3章 高梨氏と館跡の消長	11
第1節 高梨氏のあゆみ	11
1. 高梨氏の出自	11
2. 高梨氏の中野地方支配	11
第2節 高梨氏と京文化	12
1. 中央とのかかわり	12
2. 京文化の摂取	13
第3節 高梨氏の没落と館跡	14
1. 高梨氏の没落	14

2. 近世の高梨氏館跡	14
3. 近代の高梨氏館跡	15
4. その後の高梨氏館跡	15
 第4章 発掘調査	17
第1節 調査	17
第2節 遺構各説	17
1. 建物址	17
2. 庭園址	24
3. 小口	26
4. 溝址	27
5. 石積縦穴	28
6. 土坑	30
7. 土壘	30
8. 堀	31
第3節 遺物	31
1. 土器・陶器	31
2. 金属製品	38
 第5章 成果と課題	45
第1節 遺構	45
1. 土壘	45
2. 小口	46
3. 建物址	47
第2節 出土遺物について	47
1. 中世土師皿	47
 第6章まとめ	53
引用参考文献	54
写真図版	

挿図目次

第1図 高梨氏館跡の位置 (1:100,000)	4
--------------------------------	---

第2図 立地	5
第3図 高梨氏館跡と館廻り（1:50,000）	7
第4図 鴨ヶ嶽城	9
第5図 鴨ヶ嶽山城遠景（居館より）	10
第6図 地租課税のために製作された切図（明治9年）	16
第7図 第1号建物址（1:80）	17
第8図 第3号建物址（1:80）	18
第9図 第4号建物址（1:80）	19
第10図 第5号建物址（1:80）	20
第11図 第6号建物址（1:80）	21
第12図 第7号建物址（1:80）	21
第13図 第8号建物址（1:80）	22
第14図 第9号建物址（1:80）	22
第15図 第10号建物址（1:80）	23
第16図 第1号庭園址（1:80）	25
第17図 第2号庭園址（1:80）	26
第18図 西側土塁南小口址（1:80）	26
第19図 西側土塁北小口址（1:80）	27
第20図 東側土塁小口址（1:80）	28
第21図 中世土師皿の分類	32
第22図 中世土師皿（1:3）	33
第23図 中世土師皿（1:3）	34
第24図 中世土師皿（1:3）	35
第25図 中世土師皿等（1:3）	36
第26図 越前焼胴部の刻印	37
第27図 钉（1:3）	38
第28図 錢貨（1:3）	39
第29図 錢貨（1:3）	40
第30図 錢貨（1:3）	41
第31図 錢貨出土位置	41
第32図 建物址配置図	45
第33図 土塁断面模式図	46
第34図 各類の個数	47
第35図 各類の法量	48
第36図 中世土師皿の変遷	51

表 目 次

高梨居館跡出土銭貨一覧表(1)	42
高梨居館跡出土銭貨一覧表(2)	43
高梨居館跡出土銭貨一覧表(3)	44

写真図版目次

口絵 高梨氏館跡全景	15 第3号建物址
図版1	16 同 上
1 東山より居館跡を望む	図版9
2 調査前風景（現南通用口）	上17 第4号建物址
図版2	中18 同 上（礎石列）
3 調査前風景（居館内）	下19 同 上（雨落ち跡）
4 同 上	図版10
図版3	20 第5・6号建物址
5 安全祈願祭	21 第6号建物址礎石列
6 同 上	図版11
図版4	22 第7号建物址と焼土坑
7 試掘風景	23 第8号建物址
8 同 上	図版12
図版5	24 第2号建物址
9 試掘風景	25 同 上
10 テストピット分層状況	図版13
図版6	26 第2号庭園址
11 居館内（調査中）	27 第1号庭園址
12 同 上	28 同 上
図版7	図版14
13 建物址群（北より南）	29 庭園址（遺構確認時）
14 第1号建物址	30 同 上
図版8	図版15

上：31 庭園址配石
中：32 庭園址裏溝跡
下：33 同 上

図版16

上：34 庭園址（調査完了時）
中：35 同 上
下：36 同 上

図版17

37 庭園址（調査完了時）
38 同 上

図版18

39 西側土壘北小口（調査前）
40 同 上（表土除去時）

図版19

41 西側土壘北小口（調査完了時）
42 同 上（門跡礎石）

図版20

43 西側土壘北小口に通じる土橋と堀
44 西側土壘南小口

図版21

45 東側土壘小口（調査前）
46 同 上（調査完了時）
47 東側土壘小口に通じる土橋と堀

図版22

48 南側土壘小口脇の暗きよ施設
49 同 上（西側の石積み）

図版23

50 南側土壘小口脇の暗きよ施設
51 同 上

図版24

52 石積み方形竪穴
53 石積み方形竪穴

図版25

54 石積み方形竪穴
55 石積み方形竪穴

図版26

上：56 焼土坑
下：下層の遺構（D地区）

図版27

上：58 現南通用口土壘東側（調査前）
中：59 同 上 内（土壘断面）
下：60 同 上 内（築地塙跡）

図版28

上：61 北側土壘断面
中：62 同 上
下：63 同 上（横断面）

図版29

64 北側土壘内の石積み横穴
65 同 上

図版30

66 東側土壘断面
67 北側土壘（調査前）
68 同 上（石積み遺構）

図版31

上：69 東側土壘から北側土壘にかけての
石積み

中：70 東側土壘石積み
下：71 同 上

図版32

72 南側堀（調査前）
73 北側堀（調査前）

図版33

74 北側堀断面
75 東側堀断面
76 南側堀断面

図版34

77 中世土師皿の出土状況
78 同 上

図版35

上：79 佐波理楠と杯の出土状況

中：80 佐波理梳

下：81 土師杯

図版36

上：82 銅製釣針

下左：83 焼土坑内出土釘

下右：84 同 上（出土壁土）

図版37

左：85 焼土坑内出土銅金具

右：86 同 上（出土吊輪）

上：87 転用された五輪塔

下：88 同 上（墨書有）

図版38

89 現井戸枠

90 同 上（内石積み）

図版39

91 居館より鴨ヶ嶽（山城）を望む

92 鴨ヶ嶽山城の土塁跡

図版40

93 鴨ヶ嶽山城の堀切り

94 同 上（石積み）

図版41

上：95 高梨政道の歌碑

下：96 居館内にたてられた稻荷社と石碑

図版42

97 夏休みを利用して地元高校生の発掘調

査体験

98 東町老人クラブの皆さんによる草刈り

ボランティア

図版43

99 文化庁、河原先生による調査指導風景

100 一部整備の完了した居館内

第1章 はじめに

第1節 調査の動機

長野県指定史跡の高梨氏館跡は、明治9年以降高梨氏の後裔が所有し、管理してきた。しかし、昭和61年、高梨氏からの申し入れもあり、居宅の一部を残して、中野市に管理がうつることになった。

高梨氏館跡については、過去において諸先学により論考されてきたが、考古学的な調査は実施されていなかった。中野市教育委員会は高梨家から中野市へ史跡の管理が移管することに伴い、高梨氏館跡の保存と活用を策定するため、県教育委員会と協議を重ね、昭和61年秋、試掘調査を実施した。

昭和62年度に、高梨氏館跡を中心とした都市計画法に基づく公園整備計画が中野市によって策定され、整備のための発掘調査が必要になった。この公園整備計画はいくつかの制約があるものの、史跡の保存と活用が図られ、歴史的雰囲気を残すことを最優先することとし、史跡の保存と活用を協議する機関として中野市高梨館跡公園整備専門委員会が組織された。こうして、高梨氏館跡の発掘調査は昭和62年度から平成4年度まで、6ヶ年継続して行われることとなった。

第2節 調査体制

高梨氏館跡の発掘調査は中野市教育委員会の事務局のもとに、以下の調査団を編成し実施した。

高梨氏館跡発掘調査組織

(事務局)

教育長 鳴田 春三

教育次長 土屋 練太郎(平成3年度末まで)

〃 佐藤 嘉市

社会教育課長 小野沢 捷

社会教育課長補佐 山口 耕一

歴史民俗資料館管理係長 小林 紀夫(平成2年9月末まで)

〃 池田 利

歴史民俗資料館学芸員 德竹 雅之・中島 庄一・斎藤 久美・藤沢 高広
(調査団)

顧問 金井喜久一郎

顧問	湯本軍一
調査団長	金井汲次
調査主任	榎原長則
調査員	田川幸生・関孝一・郷道哲章・土屋積 池田実男・酒井健次

また、高梨氏館跡の保存と活用を協議する中野市高梨館跡公園整備専門委員会は次のとおりである。

田中哲雄	(前奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財センター保存工学研究室長)(平成3年1月まで)
本中真	(奈良国立文化財研究所 平成京跡発掘調査部主任研究官)(平成3年1月から)
宮本長二郎	(前奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財センター建造物研究室長)(平成3年6月まで)
細見啓三	(奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財センター建造物研究室長)(平成3年7月から)
故米山一政	(前長野県文化財保護審議会長)(平成元年度まで)
浜篤	(長野県教育委員会 文化課課長)(平成元年度まで)
山下四郎	(長野県教育委員会 文化課課長)(平成2年度から)
金井汲次	(中野市文化財保護審議会長・高梨氏館跡発掘調査団長)
金井喜久一郎	(元長野県史刊行会協議委員・高梨氏館跡発掘調査団顧問)
湯本軍一	(元長野県史刊行会常任編纂委員・高梨氏館跡発掘調査団顧問)
亀山章	(信州大学教授)
前田博	(建設省土木研究所道路緑化研究室長)
小林実	(長野県都市下水道課長)
大塚純	(中野建設事務所長)

第3節 調査の経過

1. 昭和62年度の調査

昭和62年度の調査は、昭和61年度から実施した試掘確認調査の継続であり、土壌内の建物址と庭園跡の確認調査を行った。主として表土の除去と庭園の広がりを把握することに努めた。この結果、土壌内の遺構の配置についてはごく大まかではあるが、東半分に礎石の建物址群、庭園部、その西側に広場的空間を確認することができた。

2. 昭和63年度の調査

昭和63年度の調査は高梨家の居宅が館跡の北西部に新築されることになり、当該部分の調査を実施した。この結果、西端部の建物址群が確認され、これをもとに住宅の基礎工事の掘削部分などが再検討され、設計変更がおこなわれた。また、当該年度の調査では部分的にテストピットを設け、調査した結果、建物址群や庭園跡の遺構確認面より下位に何層

かの遺構面が存在することが判明した。

3. 平成元年度の調査

平成元年度は堀と土塁の公園整備工事が先行するため、土塁内部の調査を一時中断し、土塁と堀の調査を実施した。

まず、現在通用口になっている南側入口と西側入口の土塁部分をトレンチで調査した。その結果、南側入口の土塁内には築地塙が存在し、それに隣接した館内に別の池が存在していることが確認された。したがって、南側入口は後世になって設けられたものと判断された。また、西側入口では当時の門の礎石が明確に残存していた。さらに、西側土塁の南側部分を調査したところ、暗渠などの施設をもった入口が検出され、館の正面入口としての機能をもっていたのではないかと考えられた。

4. 平成2年度の調査

平成2年度も、引き続き土塁と堀の調査を実施した。まず、館内への給水と館外への排水を究明する目的で、北東隅と南側中央部分の土塁調査を実施した。その結果、館内及び苑池から排水する水路と暗渠を検出した。また、東側入口とその北側の土塁をトレンチ調査するとともに、土塁内面の石積遺構を確認した。

5. 平成3年度の調査

平成3年度の調査は、奈良国立文化財研究所の細見啓三、本中真両先生に直接指導を受け、建物址と庭園跡の遺構調査を実施した。建物址群については数棟分の礎石群を確認し、庭園跡については池の掘り下げにより、規模や形態を確認した。

6. 平成4年度の調査

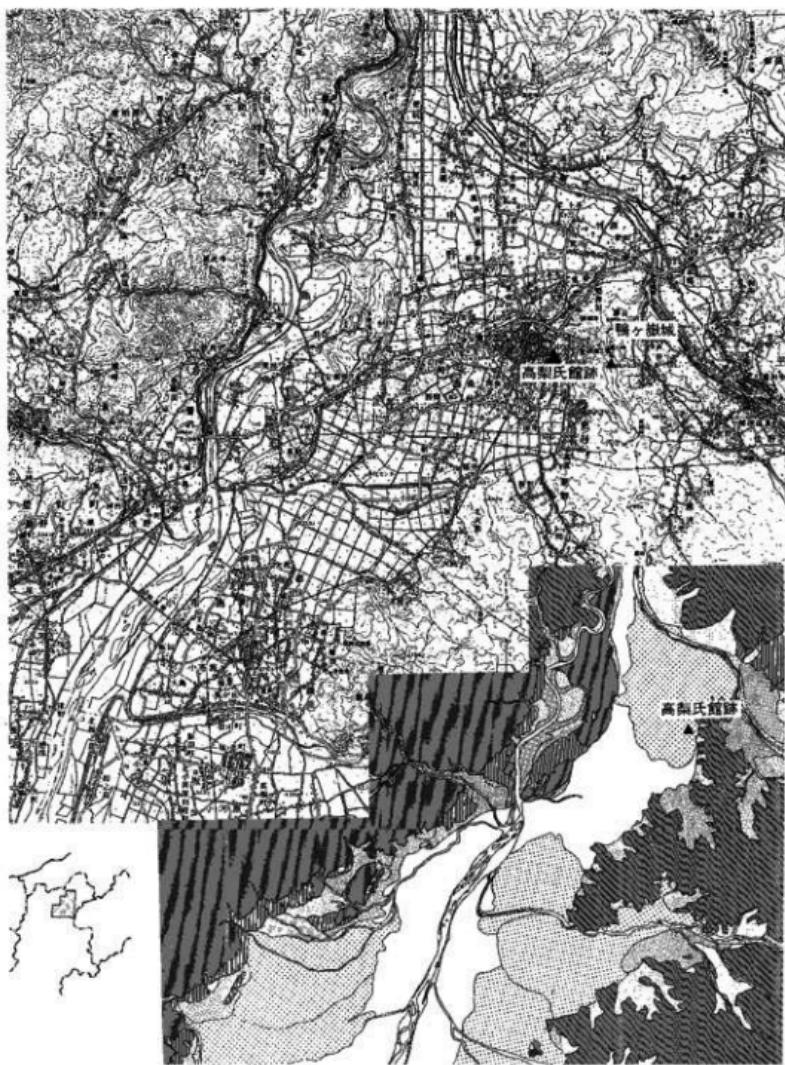
当初の予定では平成3年度をもって調査を終了する計画であったが、建物址群の規模や性格を究明する必要があり、また庭園跡の配石の再確認や周囲の水路の精査、あるいは未調査部分の一部拡張が必要になったため、協議のうえ平成4年度も継続して調査を実施することになった。

平成4年度の調査はまず庭園跡の縁石ならびに周囲の配石について精査し、景石の抜き穴を確認し、一部復元を行った。建物址群については礎石の抜き穴を中心に精査し、9棟の建物址を確認した。昭和61年より実施した高梨氏館跡の発掘調査は一部未調査部分を残して終了することになった。

この間、3冊の調査概報が刊行されているが、今年度の調査結果も加えて本報告書を発刊することになった。本報告書が今後の本格的な公園整備計画の基礎資料になることは言うまでもない。

(徳竹雅之)

第2章 環境と現状



第1図 高梨氏館跡の位置 1/100,000

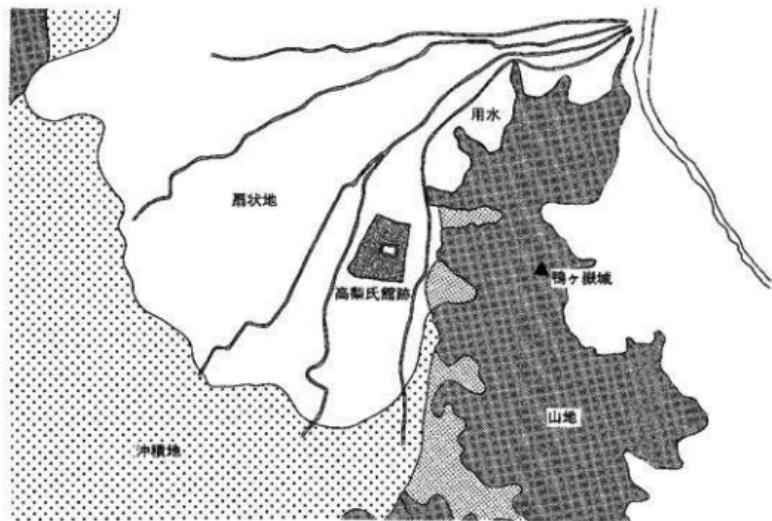
第1節 位置と立地

1. 位 置

高梨氏館跡は長野県中野市大字中野字小館1069-1番地、北緯 $36^{\circ}44'27''$ 、東経 $138^{\circ}22'49''$ 、標高約385mに所在する。

中野市は善光寺平と呼ばれる長野盆地の北端に位置する。北には高井富士と別称される高社山(1,351.5m)がそびえ、東は上信越国境の三国山脈に連なる箱山(695m)、鴨ヶ岳(688.3m)、雁田山(786.7m)の支脈が盆地縁をなす。西は長丘および高丘の丘陵が南北に延び、その背後には千曲川が北流し、さらに遠く斑尾山、妙高山、黒姫山、戸隠山、飯綱山のいわゆる北信五岳が望まれる。

三国山脈中に位置する上信越国立公園は志賀高原で知られるが、そこから流下する夜間瀬川は高社山の南方一帯に広大な中野扇状地を形成している。その広さは東西約7kmあり、扇頂と扇端の比高差は約150mある。現在の夜間瀬川は高社山麓にそって西北に流路をとり、千曲川に合流している。中野扇状地にはその形成過程を示す土砂の堆積や乱流路の痕跡が見られる。また、扇端部から南方の小布施扇状地との間には延徳田園と呼ばれる千曲川の後背湿地が広がり、葦などの泥炭層が数メートルも堆積している。



第2図 立 地

2. 立 地

高梨氏館跡は扇央部でも東扇側部に近く、箱山や鴨ヶ嶽の山麓縁から300mと離れていない。この間には旧河道が浅い谷状の低地を形成し、水田化しやすい条件を有している。ちなみに、中野扇状地における弥生時代以来の農耕集落は、扇状地の南側に広がる千曲川の後背湿地と扇端部との接点を中心に早くから成立し、この扇側部にかけて弧状の広がりを見せていている。また、夜間瀬川の氾濫は扇状地西側に著しく、館跡を含む東側は比較的安定している。高梨氏館跡は鴨ヶ嶽城など軍事的な立地を背景としながら、水害をさけやすい位置に館を構えたとすることができよう。

3. 高梨氏館跡の周辺

北信濃を代表する戦国期の領主・高梨氏の館跡は今日その姿をとどめているが、館跡を中心とした城下的割は余り明確ではない。

郷道哲章氏は館の軸の方向と現存する道路の方向から、高梨氏館跡の周辺に若干戦国期の城下的割を想定している（郷道 1987）。

館跡の軸と並行する道路には、まず、館の南側150mには東西に延びて、如法寺大門に通じる道がある。如法寺は『今昔物語』にその名がみえる寺である。この道は現在中野高校で途切れるが、字境になっており、さらに西に残る道に通じていたものと考えられる。この道より250m南に位置する小田中神社前の道も、同じ方向で東西に延びている。諏訪町の北にある小道も、館跡の東西の軸に平行しており、帶瀬峠に向かっている。この道の北約100mにも同方向の道がある。

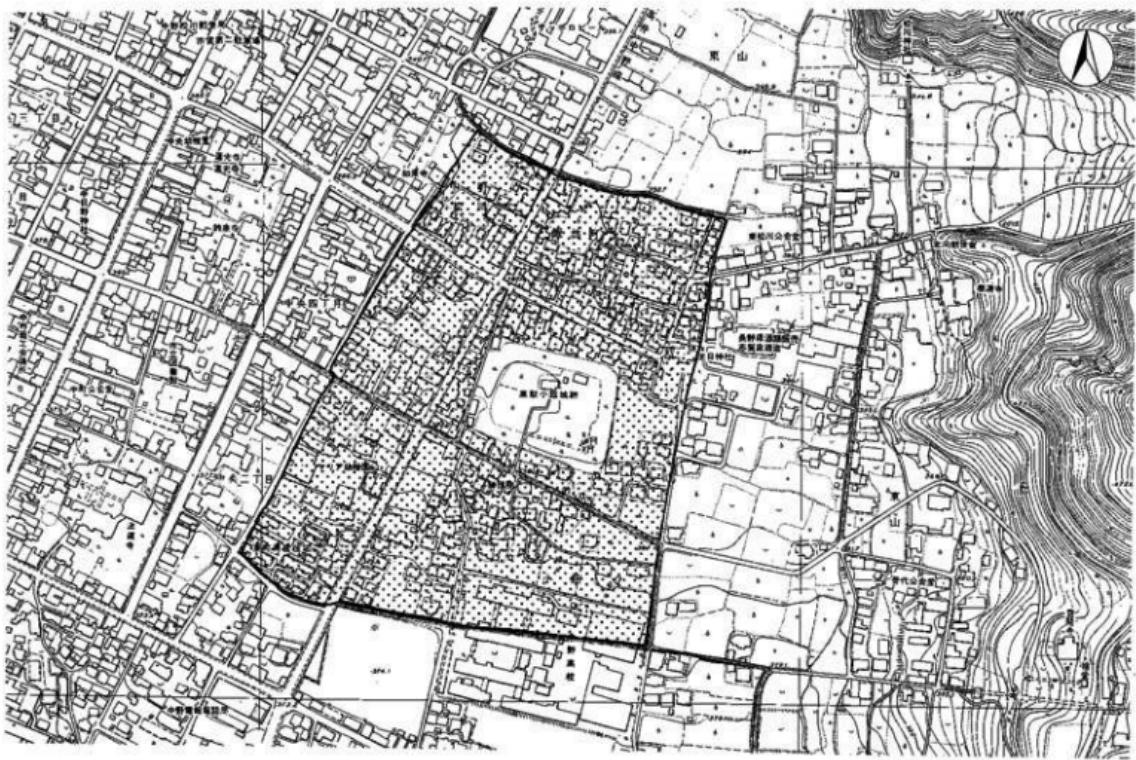
これら東西方向の道と直交する南北方向の道には、譜代・東松川の更科堰沿いの道、上小田中から館跡の東を通り、王日神社の参道へ至る道、間山方面から来て、上小田中を通り、館跡の西を通る道などが指摘されている。

さらに、こうした道路が見られる範囲にそって、高梨氏との関係を伝承する如法寺・鈴泉寺・泰清寺・南照寺・靈闇寺・王日神社・南宮神社・中日野神社・武水穗神社・山神社・浅間社が半円をえがくように分布し、城下の外郭を画するのではないかと指摘している。

また、現在の市街地の中心である中町・西町・東町の縦通りは磁北から20度程ずれ、高梨氏館跡の軸線とは5度程ずれている。中町・西町・新田町（東町）の名が史料に最初に現れるのは寛文5（1665）年であり、高梨氏がこの地を去ってから、60有余年が過ぎている。この間に新しい中野の町並みが建設されたのではないかと指摘されている。

一方、湯本軍一氏は、寛文検地帳から地名を追求し、高梨氏館跡の周辺に広い「館廻り」という字名が存在していたことを明らかにし、高梨氏館跡が、従来考えられていたようにたんなる単郭ではなく、防御的施設の存在こそ不明であるが、二重に囲まれた居館であることを明らかにした（湯本 1991）。

館跡の周辺には、明治初年の字名で「小館（おたて）」「館廻（たてまわり）」「諏訪町」



第3図 高梨氏館跡と館廻り 1/50,000

の字名がある。これらの字名のうちでも「小館」は、中世からのものと考えられてきた。しかし、湯本氏が寛文検地帳を調査したところ、小館という字名は見られず、「館廻り」「須わ前」「堀ノ内」という字名が存在したことが明らかになった。「館廻」は、ほぼ現在の諫訪町・小館・館廻から、寛文検地帳にみえる「堀ノ内」「須わ前」を除いた広い面積をしめている。そして、この「館廻り」が、領主の居館を取り巻く地域であり、領主支配権の最も強く及ぶところであったとし、朝倉館の木戸の内に相当する所ではないかと考えている。

また、高梨城下の主幹道路は、東南から「館廻り」に入り、居館の前を通って、西に向かう、通称「谷街道」と呼ばれている道路であると指摘し、ここに街村状の城下の町屋部分の中心を想定している。また、脇道として、「谷街道」に並行して、「館廻り」の南の境界を東西にのびる道路と、「館廻り」の北を画するように東西に延びる道路があったとする。

さらに、15~16世紀前半にその起源が求められるという更科堰の存在も注目される。中野扇状地の水利は扇頂で夜間瀬川から分水された6筋の用水（八ヶ郷用水）によってまかなわれてきた。うち、館跡に關係すると考えられるものは更科堰で、扇状地の東を画する山地の付け根を通り、この堰筋の雀崎から分かれた靈闇寺用水は、高梨氏館の用水路筋としては恰好の位置にある。

第2節 城館跡の現状

1. 調査前の状況

館跡は台形状の単郭をなし、堀外で東西約130m、南北約100mある。調査前の土塁下部の幅は4m~10mあり、西南隅に櫓が想定される高さと広さが認められる。また、南面土塁の東側は鍵の手状に屈曲している。

館への入り口は東、西、南の三箇所にある。東側の入口はやや南寄りにあり、堀には石積みの土橋が築かれている。西側の入り口は北寄りにあり、石積みの土橋が築かれ、櫓があったと思われる西北隅の高い土塁に接している。南側入り口は中央よりやや西寄りにあり、石積みの土橋がある。

土塁内側では東側78m、西側60m、南側と北側が各86mあり、東側が長い台形状をなす。面積は6,180m²余、全体に西南に傾斜し、最高所の東北隅で標高385.6m、最低所の西南隅で383.4m、その差2.2mを測る。

土塁内の東南部には稻荷神社とその参道、養蚕社、井戸、井戸修復の「遷魂水碑」、館の由来を記した「日野井碑銘」、高梨政道の歌碑などが集中し、北側には高梨家居宅があつた。いずれも、高梨氏館跡とは無関係の後世のものである。井戸は館にとって必要不可欠なものと考えられるが、発掘調査では発見されなかった。あるいは、現存している井戸がかなり古くさかのぼるのかもしれない。河原石の野面積みで円形を呈し、深さは9m程で

あるが、これは嘉永年間に改修されたものである。

また、東南部には庭石の露頭や池状の窪地があり、調査前から庭園跡の存在が予想されていた。

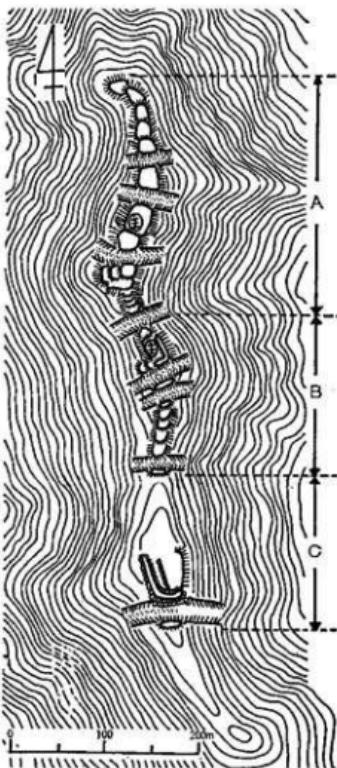
2. 鴨ヶ嶽城跡

高梨氏館の詰城である鴨ヶ嶽城跡は標高688.3mの鴨ヶ嶽山頂にあり、館との比高差は約300mある。城跡からみると東方には、山ノ内町の東南地区が一望され、その南方は視界が遮られるが、約1km先に菅城（間崎城）があり、南側の防御を補完している。また北方、約700mにある箱山の山頂には砦があり、北側の防御の補完をしていたと思われる。西方は高梨氏館がある中野扇状地を眼下に、その先に白く光る千曲川と善光寺平を一望することができ、さらには南の川中島や姥捨山まで見渡すことができる。

城跡は尾根に沿って南北500mにわたり遺構が残され、北からA・B・Cの三つの地区に、各々の特徴がみられる（郷道 1987）。A地区は主郭と二つの副郭を中心に堀切、段郭、帯郭などが築かれている。主郭の南側には高さ2m程の盛土があり、山城の最高所にあたる。馬踏みの広さからここには櫓台的な施設が存在していたものと思われる。

B地区はA地区の南側に隣接するブロックで、主郭と北側左右の小郭を中心に堀切、段郭、土塁等が築かれている。主郭の南側にはA地区と同様の高さ1.6mの盛土がある。また、A地区に見られなかった高さ1m弱の土塁は北側から東側にかけて19mにわたって残存している。この形態は中野市新野の小曾崖城跡の例に見られる。小曾崖城跡は出土遺物から15世紀頃に使用されていたと推定されるので、鴨ヶ嶽城跡のB地区もほぼ同時代に築かれたものと考えられる。

C地区はB地区の南側にあたり、城跡最大の平坦地になっている。しかし、ここには深さ7mの大堀切や、約60mにわたる土石塁があるのみで、主郭等の遺構は存在しない。しかも、土石塁は恒久的なものではなく、応急的に築かれたと観察される。



第4図 鴨ヶ嶽城

以上、鴨ヶ嶽城跡の現状を概観した結果、B地区に古い様相と考えられる土塁が存在することから、この城跡は少なくとも15世紀頃にB地区が構築され、以後少しづつ、拡大強化されたと思われる。そして、高梨時代の永正10（1513）年前後から村上氏と、ついで天文22（1553）年前後から弘治年間にかけて、甲斐武田氏との緊張関係の中で、総じて南方に向かっての防御を強化した様相がうかがえる。



第5図 鴨ヶ嶽山城遠景（居館より）

第3章 高梨氏と館跡の消長

第1節 高梨氏のあゆみ

1. 高梨氏の出自

高梨氏が文献に現れるのは平安時代末期で、木曾義仲に従った高梨高信や高梨忠直の名が見える。源平の合戦などを通じ、北信地方に台頭した武士団の一つと考えられるが、その出自は定かでなく、次のような説がある。

- (1) 清和源氏の源頼季を祖とする井上氏の支族で、須坂市高梨付近を本拠とした開発領主（湯本 1981）。
- (2) 越後高梨（小千谷市）からでた豪族で、信濃川をさかのぼり、須坂市を本拠に成長した武士団（井上 1970）。
- (3) 古代豪族阿部氏が奥州遠征後、上高井郡小布施町に土着し、高梨を称した（一志 1979～81）。

高梨氏の存在が文献史料のうえで明確になるのは、鎌倉時代以後である。建治元（1275）年5月の醍醐寺文書「六条八幡宮造営注文写」の中に、信濃國高梨判官代跡五貫文・越後国高梨藏人五貫文とあり、高梨一族が信濃と越後に併存していたことがわかる（石井 1993）。信濃高梨氏の所領は鎌倉時代から南北朝時代かけては、東条莊山田郷駒馬（上高井郡高山村）、北高梨（同郡小布施町か）、林（不明）、上浅野（上水内郡豊野町）、倉井（同郡三水村）、小島郷（長野市）などがあげられ、所領は千曲川西岸を中心と点在していた。南北朝の初め暦応元（1338）年、高梨氏の惣領経頼・経家は一族の所領紛争に対し、一族衆の裁判による裁定を行っており、崩壊する惣領制的結合の再編強化を図っている姿がうかがわれる（湯本 1970）。

明徳3（1393）年には高梨氏の所領は、善光寺周辺を中心として下高井郡山ノ内町や飯山市に及んでいる。その間延文2（1357）年には吉田郷（中野市）、応安3（1370）年には安田郷（飯山市）・大倉郷（大倉崎か、同市）と勢力を拡大している。また、応永7（1400）年の大塔合戦では、高梨朝高が草間氏（中野市）や木島氏（飯山市）など500余騎を率い、反守護勢力の有力武士団として出陣している。さらに、宝徳元（1449）年には、高梨一族15人が所領に関する10カ条の協定を結び、同族連合の強化を図っている（湯本 1991）。

2. 高梨氏の中野地方支配

高梨氏の勢力拡大に対して、越後国守護上杉房定と結ぶ新野頼安（中野市）・大熊高家（同市）は、高梨政高と対立を深めていたが、寛正2（1461）年12月、守護一族の上杉右馬頭が信濃に侵入し、高橋（中野市西条）で戦いが起った。この戦で右馬頭は討たれ、新野・

大熊氏が滅亡し、高梨氏は中野地方の中心部へ進出する足がかりを作った。

1467年の応仁の乱に始まる戦国時代に高梨政高から惣領家の家督を継いだ高梨政盛は、同族の山田高梨氏を滅ぼして権力の集中強化を進めるとともに、中野氏系の夜交景園に下上条（山ノ内町）・西条・岩舟・高遠（中野市）の地を安堵し、高梨氏への従属を強めている。さらに、永正7（1510）年、越後の長森原（魚沼郡十日町）の戦いで、高梨政盛は姻戚関係にある守護代長尾為景に加担し、戦勝している。この時、長森原の牛頭天王社（祇園社）に戦勝を祈願したことから、今に伝わる中野祇園祭が始まったとされる。

高梨氏の従属下にあった中野地方の夜交氏・小島氏は中野氏残党と結んで、永正10（1513）年、越後国守護上杉定実・村上氏らを後ろ盾に反乱を起こしたが、高梨氏家臣の草間氏に機先を制され、鎮圧された。これにより、中野地方は長期にわたる中野氏の支配が終り、高梨氏の支配が確立した。この前後高梨政盛は一時本拠をおいた間山（中野市）の石動の館から中野の館に移ったとも考えられる。ちなみに、近世史料の『中野古来覚書』は、中野の館の築城成就を永正12（1515）年と伝えている。

第2節 高梨氏と京文化

1. 中央とのかかわり

地方豪族の中央志向は乱世とはいえ、自己の権益を守るためにかなり強いものがあった。高梨氏と室町幕府とのかかわりをみると、高梨政高は寛正6（1465）年、幕府の奉行人伊勢貞親と交流をもち、訴訟に関して馬をおくっている。その子政盛も、京都若王子社の仲介で貞親の執事總川親元に物を贈っている。その子澄頼（または政盛か）は將軍足利義植に馬二頭を献上している。いずれも、政治的なかかわりをもった行為である。

朝廷に対しても、澄頼の子政頼は天文13（1544）年に禁裏修理料として金子5,000疋と馬を献じ、從四位上に叙せられている。このため、高梨家では勅使藤原尚顯を迎えることになった。これに関連するかどうか定かでないが、政頼時代と思われる館普請に関する記録がある。これには大門改修に必要な部材を領内の家臣・郷村に割当て、城館の体裁を整えている。

大門次第之事

門之広サ一丈三尺

一 柱一本 後（役か、以下同）小嶋殿之届

一 柱一本 後上条之届

一 冠木 後夜交殿之届

一 まくさ 後金倉之届

一 車寄 同

一 扉材木 後小蒼之届



(「高梨文書」)

これをみると門の形式は冠木門であり、小嶋氏（山ノ内町）・夜交氏（中野市）・上条（郷）などの近辺から大きな部材を集め、遠く岳北の小菅（飯山市）からは扉材が寄進されてい る。

戦国武士にとって、零落した朝廷といえども、その権威をいただくことは戦国大名に限らず内外に対し大きな権威づけとなつた。高梨氏においてもそうした志向は強かつた。

2. 京文化の攝取

地方豪族の中央志向を高めたもう一つの要因は、地方にない京文化の攝取であった。戦乱によって衰退した文化人の公家・僧侶には、地方豪族に経済的なつてを求めるべきはならない面があった。そうした中で高梨氏が結び付きを深めたのは、三条西実隆である。

この当時、三条西実隆は越後の苧原の支配権をもち、青苧座本所として収入を得ており、実隆はこの収益を守るために長尾為景の援助をうけていた。長尾氏と昵懇の間柄であった高梨氏は長尾氏の同族とも見られていた。こうした関係もあってか、文亀3（1503）年、越後国高梨刑部大輔政盛は、『古今集』の筆写の謝礼として500疋を実隆に届け、翌永正元年夏に越後上布の帷子を贈り、同年秋には「伊勢物語」の代筆を依頼している。

政盛か、その子澄頼か定かでないが、大永3（1523）年6月5日、実隆に高梨氏家人の僧が金子100疋を礼金として贈り、「伊勢物語」の講席に出席し、翌日の帰国に際して扇面の和歌、短冊を贈られている。そして、10日に信濃の僧暁雲（さきの高梨家人の僧）が歌合わせに合点してもらい下向している（実隆公記）。

澄頼（あるいは政盛か）は和歌の他に連歌も嗜んでいた。実隆と飯尾宗祇は連歌を通じて親交があった。宗祇の弟子、宗長は三条西実隆や各地の文化人、あるいは地方豪族と交わり、連歌を指導しているが、永正12（1515）年正月、甲斐より信濃に入り、諏訪から佐久・坂木（城）を経て、3月に中野高梨館に到着している。しばらく滞在し、連歌の指導をした後、更級・松本・木曾を過ぎて美濃に至り、美濃から越前朝倉館に赴いている。

この紀行については、その著「那智籠」によって詳細に知ることができる。それよれば、宗長は三月下旬の頃高梨館に着いて、北信濃の遅い花の春を主人に暖かく接待されて、初夏の頃まで滞在した様子がうかがわれる（金井 1979）。「那智籠」には、発掘調査で明らかになった庭園を詠んだ句があり、注目される。

さらに、永正17（1520）年には時衆（宗）24代の不外上人も高梨館を訪れ、連歌などを詠んでいる。この中に新善光寺と呼ばれる寺があったことが記されており（『逆行二十四祖御修業記上』）、注目される。

澄頼の子政頼は蹴鞠を公家の飛鳥井雅教に学び、葛袴・鴨靴使用の免許を与えられている。京文化にあこがれる政頼は武田信玄の北信濃侵攻作戦中の天文21（1552）年12月、上洛を企て在京百日間の夫役を領内の下木島（飯山市）・金藏（山ノ内町）・柳沢・江部・岩

井・新保（以上中野市）・雁田（小布施町）・志妻・蓮（以上飯山市）に譲り、上条・上木島・前（間）山に留守中の夫役を申しつけている。

翌年正月、岩井氏を伴い、政頼は大阪の石山本願寺に光教（証如）上人を訪れている。「信濃国高梨刑部大輔（政頼）巡見のついでに札に参ることで対面した。高梨は太刀と金子1,000疋持来り、同名民部大輔は太刀と金子100疋を持参した」（『証如上人日記』）である。

このようにみてくると、高梨氏と京文化のかかわりはかなり深く、高梨氏館では庭園をはじめ日常生活の中にも、京文化が大きく反映していたものと思われる。

第3節 高梨氏の没落と館跡

1. 高梨氏の没落

甲斐の武田信玄は天文22（1553）年、村上義清の本城・葛尾城（塙科郡坂城町）をおとし、塙田城（上田市）も占領した。こうして越後の長尾景虎と対決する川中島の戦いが始まるが、弘治元（1555）年前後には高梨氏館の背後を領有する小島・夜交氏が、反旗を翻して武田氏に臣従した。この前後、高梨政頼も飯山城（飯山市）に退去したとみられる。

永禄3（1560）年、長尾景虎は関東出陣のため、飯山城の政頼に合力を命じている。その翌年9月、川中島の八幡原で甲越両軍が激突し、失地回復をめざす高梨氏も村上・井上・島津氏らとともに上杉方の先陣を勤めた。この合戦を契機に上杉氏は武田勢に押され、飯山・野尻城を残して越後に退去し、信濃国は30年近くほぼ武田氏の支配するところとなった。そして、武田氏の滅亡後まで、高梨一族の小島氏が、反高梨氏の恩賞として高梨氏館に在城したようである。

天正3（1575）年、長篠の戦いで武田氏が敗れるが、その翌年4月11日、高梨政頼は越後に客死した。天正9（1581）年、越中から越後に出陣しようとした織田信長が、高梨喜三郎（政頼の長男か）に協力を求めてきた一件で、喜三郎は景勝に誅殺された。一説には喜三郎の子孫は、後に尾張徳川家に仕え、尾張高梨の系統といわれるている。高梨の家督は頼親が継いだ。

天正10（1582）年武田氏が滅亡すると、川中島地方は森長可の領する所となるが、本能寺の変で長可は本国の美濃に退去した。このため、北信濃四郡はさしたる戦いもなく、上杉景勝の領有に帰し、高梨頼親は30年ぶりに帰郷したが中野館へ入ることができず、中野市安源寺の館にとどまっていた。しかし、頼親の中野帰館の執念は強く、天正18（1590）年、昔の小鳴氏から中野館を譲り受け、小鳴氏には同族紋幕の使用を許している。

2. 近世の高梨氏館跡

慶長3（1598）年正月、豊臣秀吉は上杉景勝に対し、越後一国などおよび信濃川中島四

郡（高井・水内・更級・埴科）のかわりに、会津若松を本城とした陸奥・出羽（120万石余）への移封を命じた。海津・長沼両城について、「会津国替に際しては、家中の侍は勿論、中間、小者など武家奉公人は一人残らず連れて行け。行かないと言うものは成敗せよ。ただし、田畠を持ち、年貢を負担し、検地帳に登録された百姓は、いっさい召し連れて行つてはならない」という嚴命を下している。二月に入って年貢・歳米・借物・売買・百姓仕置などの領内のあと始末をすませ、城内の戸障子一本までも取り揃えて、石田三成の配下奉行衆に三月中・下旬まで引き渡された。

こうして、小館の居館と高梨氏との関係はなくなり、町場も変化し、荒廃した姿をとどめていたものと想像される。この間、中野を根拠地とした領主は、いなかつたと考えられる。

北信濃に江戸幕府直轄領が成立したのは、元和2（1616）年であった。この年、代官松平清左衛門が中野村に陣屋を設けたと伝えられるが、元和4年に旗本河野氏勝（1,500石）の陣屋が中野村におかれた。次に幕府直轄領になるのは、寛永元（1624）年の福島正則死去による所領没収によってである。以後、中野村は板倉重種領（埴科郡坂木藩）の一時期を除き、江戸幕府直轄領として幕末までつづく。

この間、寛文5（1665）年の代官天羽七右衛門の検地「信州高井郡中野村畠方御地御図帳」によれば、館跡の廻りの字「館廻り」は13歩で、下畠9反3畝で、集計すると約12町歩に達している（湯本 1991）。一方、字「堀ノ内」は下畠18歩、耕作者角左衛門となっている。堀の内という字名は館跡の一端を示すものであろう。

3. 近代の高梨氏館跡

明治3（1870）年、東・北信の旧天領、旗本知行地を管理する中野県が設けられたが、同年12月の暴動で庁舎が焼失した。この復興の定まらない明治4年4月11日、維新後初めての神武天皇祭が、高梨氏館跡で執り行われている。これは、館跡が官有地と見なされていたことによる。また、この場所に県庁舎再建の計画がなされ、設計図もできあがった。しかし、同年7月、長野県となり、庁舎は長野町に移った。

明治7（1874）年、それまで夜間瀬本郷の畔上源兵衛の「堀ノ内」は地租改正によってか、中野町の畔上孫兵衛（塩屋）の持分となった。このような先祖の由緒の地の実状を知った愛知県士族高梨政道は、初めて中野町に来て旧縁の人達と話し合い、官有地の払い下げ運動を開始し、明治9年3月、下げ戻しが実現した。

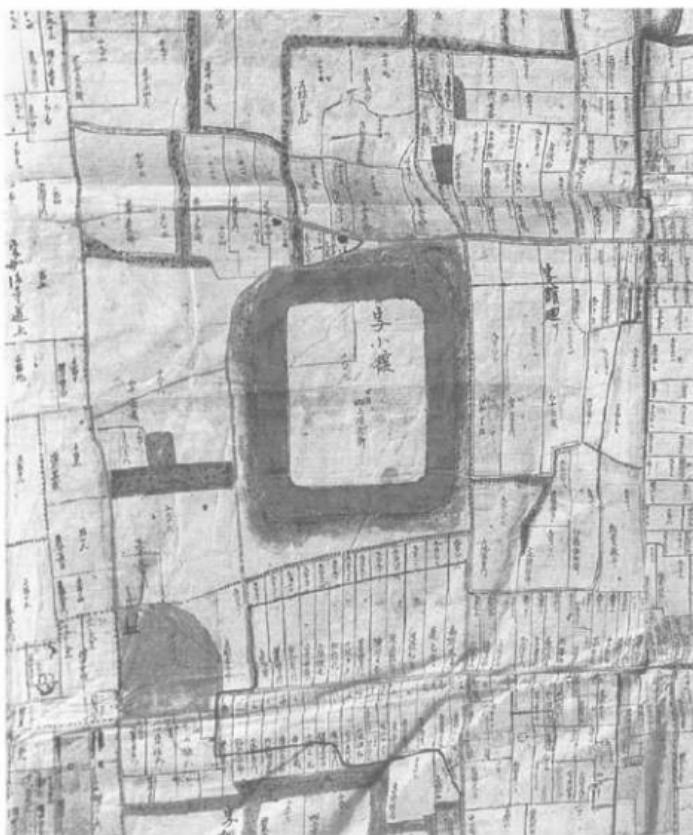
4. その後の高梨氏館跡

こうして慶長3（1598）年以来、館主が不在であったと考えられる館跡に、高梨一族の後裔が住むことになった。その後、館中央北寄りに住宅が建築されたり、西南部に住宅や倉、不動堂なども建築された。また、東南にあった稻荷社の祭礼も盛大に行われたと伝えられ

ている。

昭和元（1926）年、藤沢直枝氏が館跡および鴨ヶ嶽山城を調査し、長野県史跡に指定された。その後、昭和24年に中野町史跡保存会が結成され、館内に石碑が建立された。しかし、郷土への愛着心からか、山城の築城を天治2（1125）年に、居館を関山国師の生家とするなど問題もあるが、文化財保存の先駆的試みとして評価されるであろう。昭和44年1月3日、文化財保護法の改正に伴い、高梨城跡として高梨氏館跡・鴨ヶ嶽城跡が改めて県史跡に指定された。

（檀原長則）



第6図 地租課税のために製作された切図（明治9年）

第4章 発掘調査

第1節 調査

調査は昭和61年～平成3年度まで、足掛け6年間にわたって断続的に実施し、第1遺構確認面までの調査を終了した。土壙内については調査が物理的に不可能な部分をわずかに残し、ほぼ全面を、また、土壙・堀についてはトレーナによる調査を実施している。

調査区は東南隅を起点として、2m×2mのグリッドを南北の縦軸はアルファベットのA～Tまでを北に向かって、東西の横軸は数字の1～31までを西に向かって割り振り、交差グリッドをアルファベットと数字（たとえばA 1グリッド）で命名している。しかし、一部で当初計画より南および東に拡張する必要が生じ、起点を中心南北の縦軸は南に向かってA'・B'…と、東に向かって-1・-2…と割り振っている。

第1遺構検出面は表層直下にあり、比較的浅く、後世の耕作や石碑などの建立で攪乱を受け、建物の礎石や庭園の景石などが抜かれていた。しかも、遺構の検出面は小石などを含んでおり、遺構検出に困難を極めた。なお、第1遺構検出面以下の土層内には焼土が含まれており、さらに古い時期の遺構面の存在も予測される。

第2節 遺構各説

1. 建物址

合計12棟の建物址を検出している。いずれも遺存状態が悪く、全体を明瞭に把握出来たものはない。したがって、建物址の復元には推測による部分が多いことをあらかじめ断っておきたい。

(1) 第1号建物址（第7図）

位置：B～D15～17、E～D15～16グリッド

規模：不明 東西に1列3個の礎石、南北

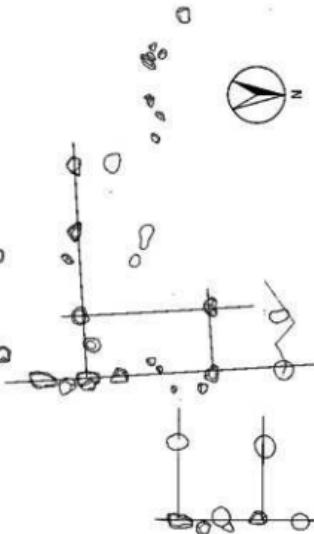
に1列3個の礎石を検出。

種類：礎石建物。

構造：不明。

付帯施設：不明。

備考：第2号庭園址を切る。



第7図 第1号建物址 1/80

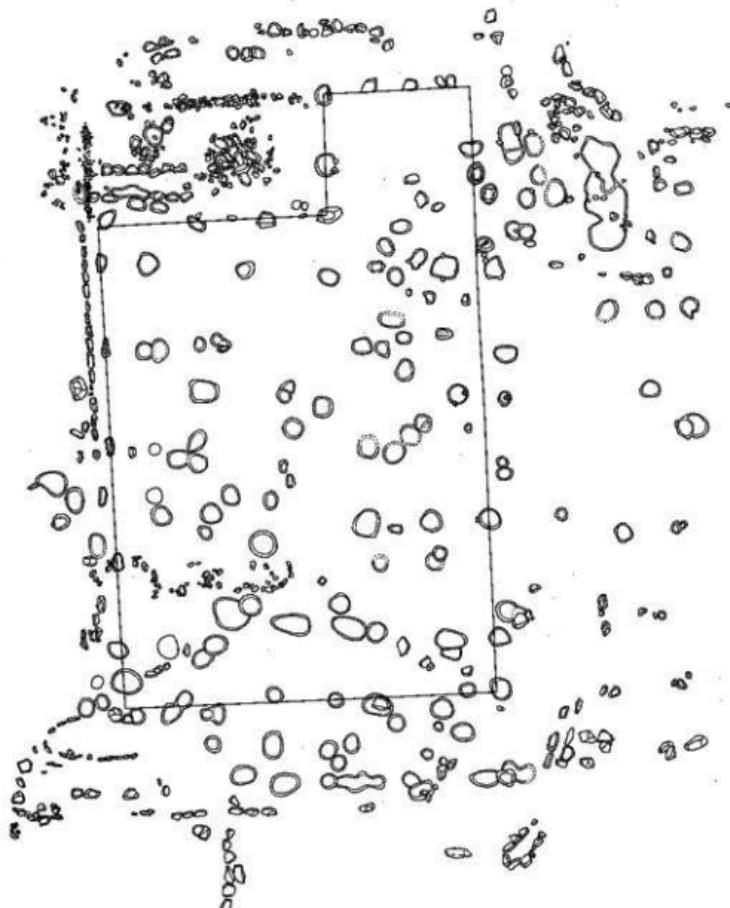
(2) 第2号建物址

位置: L17、L18、M17、M18グリッド。

規模: 不明 (未調査部分有り)。

種類: 磚石建物。

構造: 不明。



第8図 第3号建物址 1/80

付帯施設：不明。

(3) 第3号建物址（第8図）

位置：E～I 4～11グリッド。南側は第1号庭園、北側は第4号建物址に隣接。

規模：東西6間×南北4間（推定）。

種類：礎石建物か（遺存状態悪く、部分的に礎石あり）。

構造：西面北に玄関（1間半×1間半）。西面、南面、東面に庇（半間）。

付帯施設：坪庭状遺構（西面南）。築地塀（西面南）。

備考：北面、西面を溝で区切られる。

南面に接して、第1号庭園址が接続する。

(4) 第4号建物址（第9図）

位置：H～L 9～13グリッド、東に第5号建物址が接する。

規模：東西5間×南北4間（推定）。

種類：礎石建物か（部分的に礎石あり）。

構造：不明

付帯施設：不明

備考：南面の最も西に東西

に短い石列があり、同様
に西面のほぼ中央に石列
がある。本来のすがたを
とどめているのか、一部
が残存しているのか不明
である。

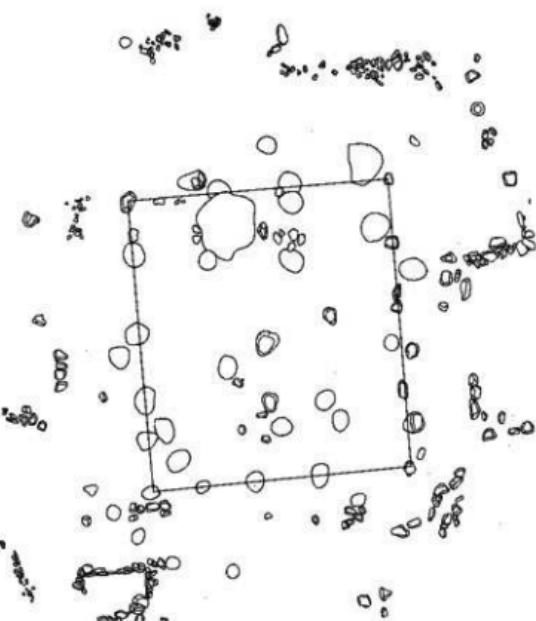
北面東部に石列と砂
利列が並行して認められ
る。本建物址の一部とも
考えられるが、やや距離
が離れすぎる。別の建物
址の一部であろうか。

(5) 第5号建物址（第10図）

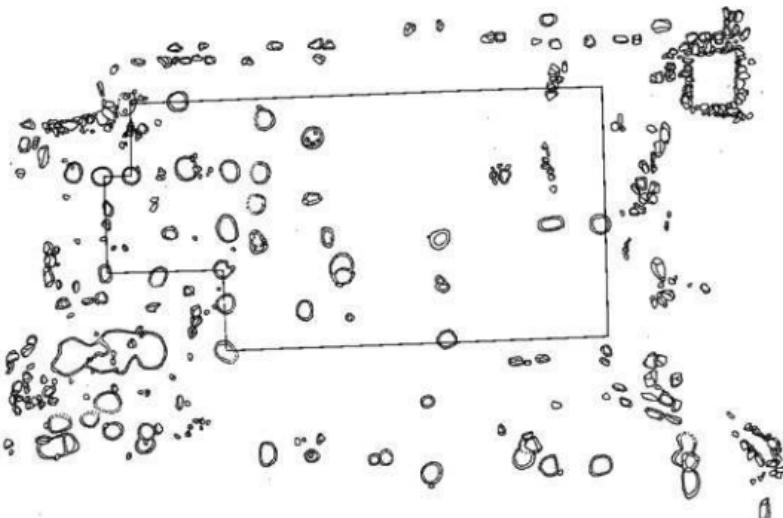
位置：H～K 5～10グリッ

ド。西に第4号建物址、

南に第3号建物址、北に



第9図 第4号建物址 1/80



第10図 第5号建物址 1/80

第6号建物址、東に第7号建物址が隣接する。

規模：不明。

種類：掘立柱建物址か。

付帯施設：不明。

備考：北側・東側・南側は溝で画される。溝は北西隅および南西隅で鍵の手状に蛇行する。

建物址の柱痕跡の遺存状態は良くない。柱穴は建物の西面部分に認められるのみであり、規模など詳細は不明。

(6) 第6号建物址（第11図）

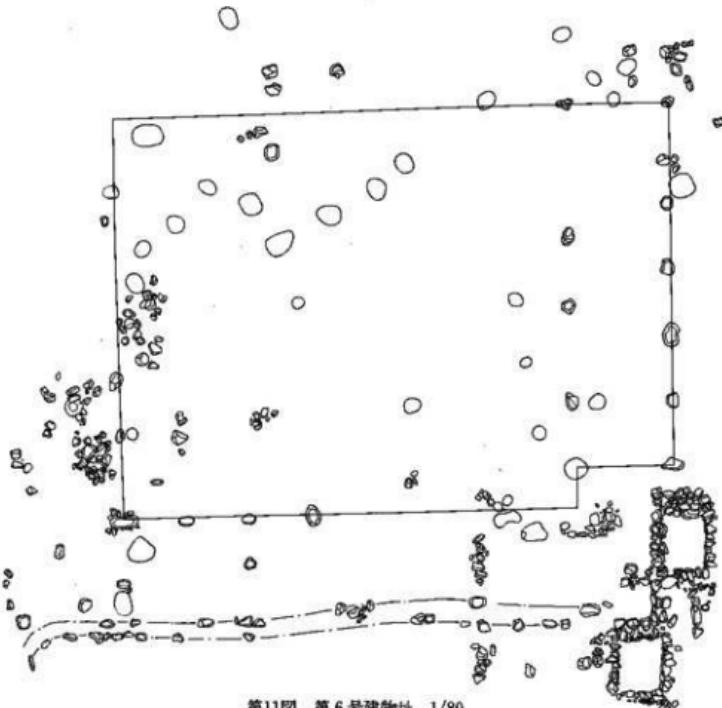
位置：K～O 5～10グリッド。南に第5号建物址、北に第10号建物址、東に第8号建物址が隣接する。

規模：東西9間×南北7間。

種類：礎石建物か。

付帯施設：無し。

備考：東面を画する二列の礎石列（7間、一部抜き取りあり）、南面を画する礎石列（西から4間、一部抜き取りあり）および西を画する礎石列（南から2間抜き取りあり）から、建物址の規模を推測したものである。建物址の北面部分は不明瞭であった。南側は溝で画される。



第11図 第6号建物址 1/80

(7) 第7号建物址(第12図)

位置: H~K 1~5 グリ

ッド。西側は第5号建

物址が、北側は第8号

建物址が隣接する。東

側には東面土壁の出入

り口が位置する。

規模: 南北 2間 × 東西 7

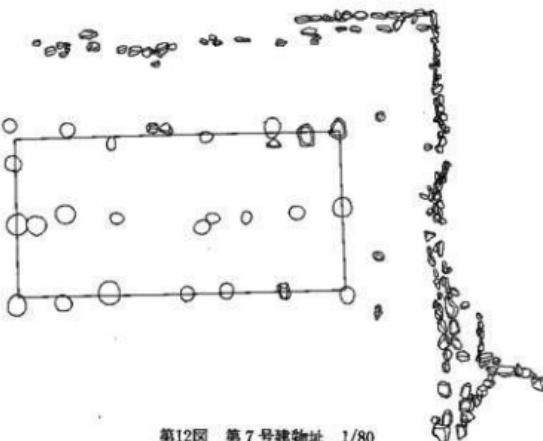
間。

種類: 砂石建物か。

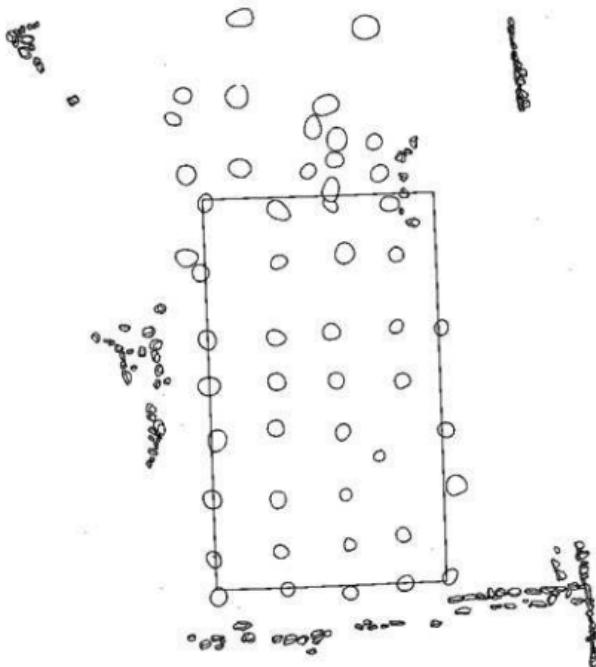
付帯施設: 無し。

備考: 建物址内に土壌あ

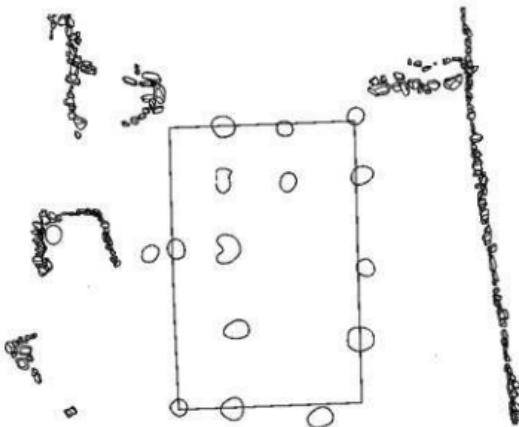
り。



第12図 第7号建物址 1/80



第13図 第8号建物址 1/80



第14図 第9号建物址 1/80

(8) 第8号建物址

(第13図)

位置：K～O 1～5
グリッド。西側は
第6号建物址に隣
接し、南側は第7
号建物址に隣接す
る。

規模：東西4間×南
北7間か

種類：掘立柱建物。
付帯施設：北側に柱
痕跡があり、何ら
かの施設が付帯し
ていたかもしれない。

備考：南側部分の柱
痕跡は比較的整然
としているが、北
側は不規則である。

建物を北側の不規
則な柱痕跡の部分まで含
めて良いのかかもしれない。
また、場合によっては南
側が東西4間×南北5間、
北側が東西3間×南北2
間の建物になる可能性も
ある。

周辺より炭化した米・
麦・豆などが大量に検出
されている。

(9) 第9号建物址(第14図)

位置：O～Q 2～5グリッ
ド。南側は第8号建物址

と隣接する。

規模：東西2間×南北4間。

種類：堀立柱建物。

付帯施設：無し。

備考：周辺より炭化した米・麦・豆が多量に検出されている。

(10) 第10号建物址（第15図）

位置：O～R 5～9グリッド。西側に第5号建物址、東側に第9号建物址が隣接する。

規模：不明。

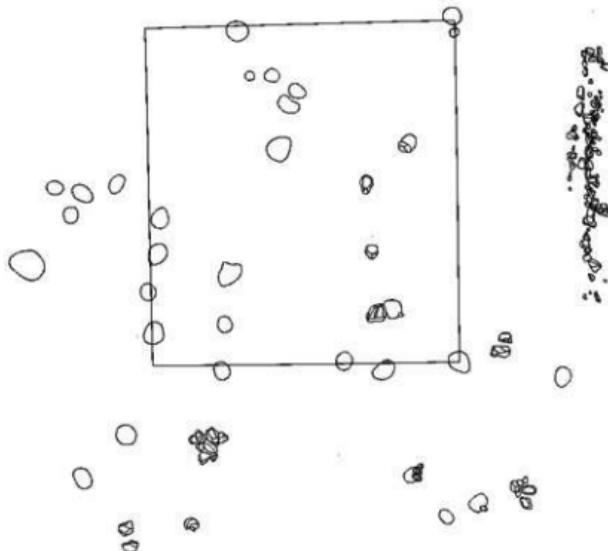
種類：礎石建物か（礎石が部分的に残存）。

付帯施設：不明。

備考：東面を画すると思われる礎石列（2間）、南面を画すると思われる柱痕跡（2間か）から、建物址の存在を推測したもので、概要はほとんど不明である。

(11) 第11号建物址

位置：L～O 5～9グリッド。第6号建物址と重複。



第15図 第10号建物址 1/80

規模：不明。

種類：礎石建物か（抜き取り痕より推測）。

付帯施設：不明。

備考：第6号建物址と軸線が約60度異なる。東西5個、南北2個の柱痕跡から推測したもので、対応する柱痕跡は確認されていない。

(ii) 第12号建物址

位置：H～K10～12グリッド。4号建物址と重複する。

規模：不明。

種類：礎石建物址か。

付帯施設：不明

2. 庭園址

庭園址は二箇所確認されている。また第3号建物址に付随して坪庭状遺構らしいものが一箇所確認されている。

(i) 第1号庭園址（第16図）

位置：A'～E' 4～11グリッド。北側第3号建物址に隣接。

規模：6 m × 8 m。

構造：不明

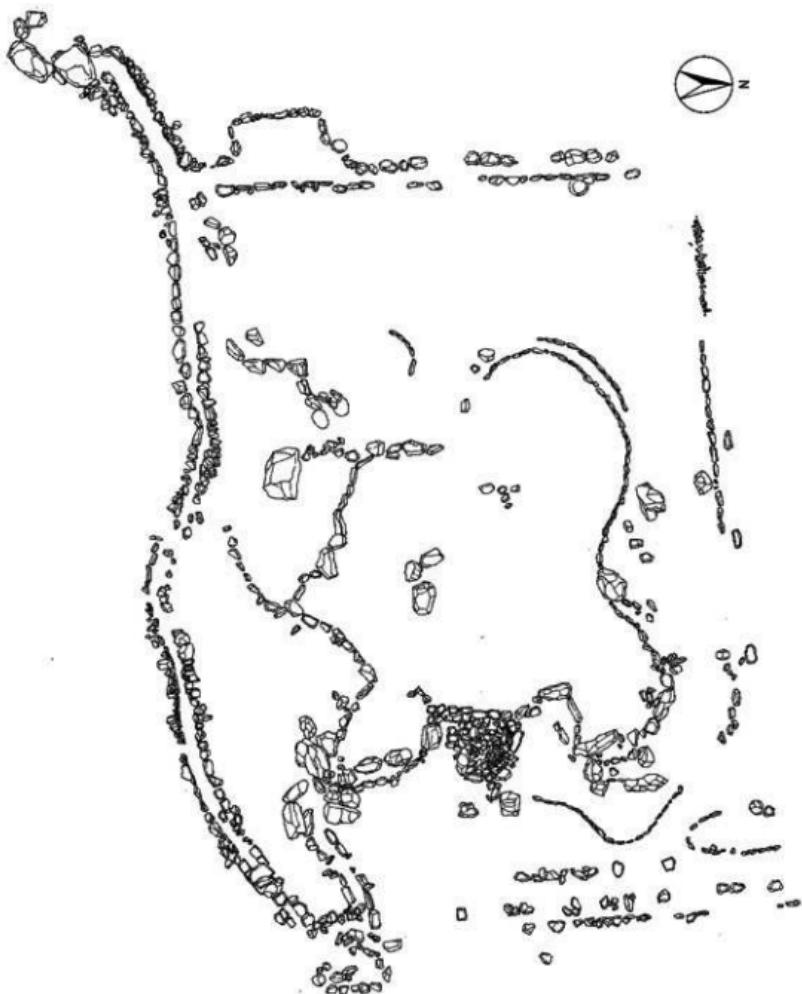
区画：北側部分は第3号建物址に面し、底の直前を東西に延びる石列によって画されている。東側部分には特に庭園を画するような遺構は確認されていない。また、東土壘との距離も若干ある。南北に設けられた給水溝を庭園の西限の一応の目安とした。南側は南土壘によって画される。西側にも庭園を画するような遺構は確認されていない。西面は南北に設置された溝で画されていたと推定した。

給水遺構：土壘に沿って、北より南に延び、南東隅で西方向に向きを変える石組の溝が滝口に接続する。

北から延びる給水溝は遺存状態が悪く途中で切れている。故意に廃絶したものが後世の攪乱によるものか明確ではないが、故意に廃絶されたものと考えている。

排水遺構：明確に排水遺構と考えられる遺構は確認されていない。ただし、池の西南には排水用と思われる石組が土壘内にあり、一時期池の水も排出されたものと思われる。

池の汀線：岩によって構成されている部分と河原石によって構成される部分がある。滝口の東から西側半分の汀線は岩、北から西側の汀線は河原石によって構成される。池の北西部の汀線を画する河原石は園路状遺構の片側として利用されている。西岸のほぼ中央に河原石で構成された洲浜状とも見られる部分があった。



第16図 第1号庭園址 1/80

滝口：池の南東部にあり、立石三個を中心に構成される。

列石：池の東側、西側に河原石を曲線的に並べた部分が検出されているが、目的は明きらかではない。あるいは園路の区画ではないかとも推測される。西側部分は池の護岸の河



第17図 第2号庭園址 1/80

原石と並行して、園路ふうの構成をとっている。その他：池のほぼ中央にやや大きめの三個の石が据えられている。また、西南部には石が一列に、やや南側に入り込んだ苑池の部分を横切るように据えられ、その南西に大きな岩が認められる。

備考：池の東岸部には石で護岸された部分より、ややレベルの高い部分に、護岸の石と並行するように並ぶ河原石が見られる。改築された可能性がある。

(2) 第2号庭園址（第17図）

位置：C16・C17グリッド。

規模：2 m × 4 m。

構造：池の周囲に岩（山石）がめぐる。

3. 小 口

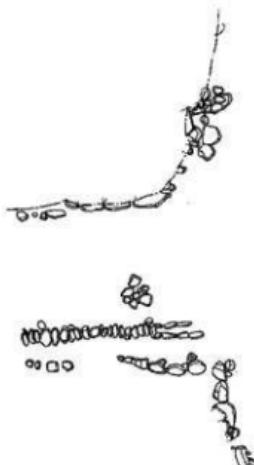
(1) 西側土壘南小口址（第18図）

位置：F26・F27・G26・G27グリッド。

規模：幅約2 m 20cm、奥行き約3 m 40cm。

構造：小口の北壁・南壁は石積みにより土止めされている。石積は土壘の内側に続いているが、未調査のためどの程度南北に広がるか不明である。

付帯施設：小口の南壁から内側に約95cmの距離をおき、並行して石組の暗渠が存在する。暗渠は幅約15cmである。



第18図 西側土壘南小口址 1/80

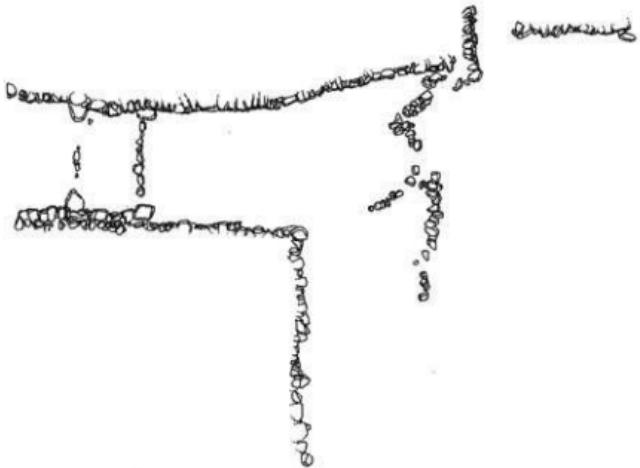
(2) 西側土壘北小口址（第19図）

位置：Q27~29グリッド。西土壘北側。

規模：幅約1 m 50cm、奥行き約4 m。

構造：小口の北壁・南壁は石積により土止めされている。中程よりやや東側に入り口を横切るように石列が認められる。この石列が門の内側にあたると考えられる。石列の両側とその西側の壁際にそれぞれ一個づつ、合計4個の礎石が検出されている。門の礎石と考える。礎石間は南北1 m 50cm、東西90cmである。

備考：前面に土橋（幅3 m 長さ5 mか）がある。



第19図 西側土塁北小口址 1/80

(3) 南側土塁小口址

位置：A A11・A A12グリッド。南土塁のほぼ中央。

規模：幅約3m×奥行き約6.5m。

構造：西壁石積(0.6m)、東壁不明。

備考：南側土塁の鍵の手状のわずかな屈曲部にある。覆土には五輪塔の一部が3点含まれていた。小口はある時期に埋め戻された可能性が高い。小口前面を中心に土塁の南面(堀側)には長さ6.5m、高さ0.5mの石積みが確認された。

(4) 東側土塁小口址 (第20図)

位置：G～I～2～1グリッド。東側土塁中央よりやや南側。

規模：幅約2.7m×奥行き約5.57m。

構造：小口の内側は石積により土止めされている。北壁石積は高さ0.4m、南壁の石積は高さ1mある。

付帯施設：北壁に沿って、側壁を河原石で画した溝あり。

備考：前面に土橋(長さ4m、幅4.5m)が接続し、その先に道路状遺構が確認された。

4. 溝 址

両側に河原石を並べた幅10cm～20cm程度の溝が、東側に集中する各建物址を画するようにな、東西南北方向に直交している。遺存状態が悪く、全体像が把握できないが、建物址を画するように設置された溝は、一続きであったと考えられる。石積方形竪穴と接続する部



第20図 東側土塁小口址 1/80

南部分に擾乱をうける。覆土は腐食性の黒色土である。

(3) 第3号石積方形竪穴

位置：J10グリッド。

規模：1.8×1.8×0.4m。

構造：側壁は石積されている。

備考：南壁と東壁のみ残存する。

(4) 第4号石積方形竪穴

位置：K5グリッド。第5号石積竪穴に隣接する。

規模：1.5×1.2×0.9m。

分や、石で溝に蓋をした部分や底に石が敷かれている部分もある。

建物を画することが目的と思われるが、一部は庭園の池の給水用と考えられる。検出された全ての溝が同時に機能していたとは考えにくいが、時期区分することはできなかった。溝の水の取入や排水は土室内の暗渠を通しておるが、取水源は不明。排水は堀へ落されていたものと考えられる。

5. 石積竪穴

(1) 第1号石積方形竪穴

位置：B10グリッド。

規模：1.8×2.5×0.45m。

構造：側壁は石積されている。

備考：溝と接続する。

(2) 第2号石積方形竪穴

位置：H13グリッド。

規模：1.8×1.2×0.5m。

構造：側壁は石積されている。

備考：北側の壁以外は崩落し、西

構造：側壁は石積されている。

備考：上部は擾乱をうける。覆土中に砂層があり、水が流れていたと考える。溝に接続する。

(5) 第5号石積方形竪穴

位置：K 5 グリッド。第4号石積竪穴に隣接。

規模： $2.1 \times 1.2 \times 1\text{ m}$ 。

構造：側壁は石積されている。

備考：覆土上部で、五輪塔の破片が検出された。

(6) 第6号石積方形竪穴

位置：P 5 グリッド。

規模： $1.6 \times ? \times 0.6\text{ m}$ 。

構造：側壁は石積されている。

備考：南側部分は擾乱されていた。覆土中より銅鏡が出土している。底部分に砂層の堆積が認められた。

(7) 第7号石積方形竪穴

位置：Q 5 グリッド。

規模： $1.5\text{ m} \times ? \times 0.55\text{ m}$ 。

構造：側壁は石積されている。

備考：底に砂層の堆積が認められた。

(8) 第8号石積竪穴

位置：B・C 5 グリッド。

規模：不明

構造：側壁は石積されている。

備考：擾乱のため規模不明。

(9) 第9号石積竪穴

位置：D 5 グリッド。

規模： $1.8 \times 1.4 \times 0.3\text{ m}$ 。

構造：側壁は石積されている。

備考：擾乱をうける。

6. 土 坑

(1) 第1号土坑

位置：J 3 グリッド。

規模： $1.8 \times 1.8 \times 0.8\text{m}$ (方形)。

出土遺物：古鉄・切り子頭の銅金具・鹿角・玉・青華・留め金具・釘・掛け金具。

備考：土坑壁・土坑底は焼けている。覆土上層中に焼けた土壁塊が混入していた。

(2) 第2号土坑

位置：Q 7 グリッド。

規模： $2.6 \times 2 \times 0.8\text{m}$ (不定形)。

出土遺物：鹿角、中世土師皿。

備考：覆土上層中に焼けた土壁塊混入していた。

7. 土 堆

土壠は完掘せずに、必要部分に横断トレンチを設定して調査した。その結果、土壠は構造的に大きく二つに分類されることが明らかになった。一つは、西側土壠・北側・南側土壠の西側部分に認められるもので、現況の土壠下に版築状の土壠状遺構が埋没している部分である。他方は東側土壠及び北側・南側土壠の東側に認められるもので、現況の土壠下に埋没した遺構は認められず、土盛りしたのみの部分である。このことはおそらく、当初は版築の土壠状遺構が方形に巡っていた時期があり、それを後に東側へ拡張付加した結果であると考えられる。

(1) 北側土壠西部分

規模：現況基底幅約 $4.6\text{m} \times$ 現況高さ約 1.5m 。

構造：現況では断面蒲鉾状を呈し、内側に土止め用と思われる石積が認められたが、これは後世のものと考えられる。断面を観察すると土壠内にもう一つの土壠が埋没している。現況土壠よりも基底は狭く 3.4m を測る。内側に高さ約 70cm の石積がある。土壠内部の古い版築の土壠状遺構は、版築工法で高さ 70cm の石垣の高さまでほぼ水平に構築され、さらにその上面中程、やや外側に幅の狭い土壠（幅約 70cm 、高さ約 60cm ）が構築されている。

(2) 北側土壠東部分

規模：現況基底幅約 $5\text{m} \times$ 高さ 1.5m 。

構造：蒲鉾状に土盛りされる。土壠の内側高さ約 80cm の部分に小さな石垣が認められる。

石垣の高さは約 30cm ほどある。

(3) 東側土壘北部分

規模：現況幅約4m×高さ約90cm

構造：内側に高さ約60cmの石垣を持つ。石垣部分からの基底幅は約3.4m、高さ約90cmを測る。

8. 堀

土壘の周囲に堀が巡らされている。トレンチによる調査を數か所実施したが、用地の関係で不十分なものであったため、堀の構造については不明瞭な部分が多い。おそらく、幅約4m、深さ2m前後の断面V字形に近いものであったと考えられる。

第3節 遺 物

1. 土器・陶器

(I) 土質質土器皿

成形技法、形態、大きさを基準として第21図の様に分類した。縦軸A、B、C、D、E、F、G、Hは成形技法および形態を基準とした分類、横軸1、2、3は相対的な大きさを基準とした分類である。1は大形、2は中形、3は小形のものである。

また、成形技法は大きく「手づくね成形されたA類とB類」と「回転台成形されたC類～H類」に分類される。

A類（第22図1、2）

大形のA1類(1)、中形のA2類(2)がある。胎土は粉質で、白色に近い。手づくね成形である。やや内湾する体部をもつ。体部には二段の強いヨコナデが認められる。そのため、体部はやや屈曲した感を与える。底部はヘラケズリ、体部下端にまでヘラケズリがおよぶ。

B類（第22図3～5）

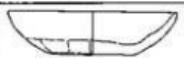
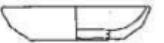
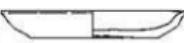
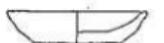
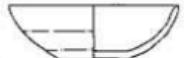
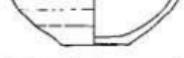
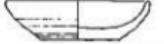
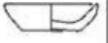
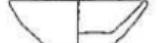
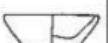
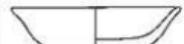
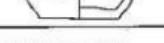
大形のB1類(3)、中形のB2(4、5)類がある。胎土は粉質で白色に近い。底部がヘラケズリされていることから手づくね成形であると考えられるが、明確な痕跡は認められない。体部の立ち上がりは低い。二段の強いヨコナデが認められ、屈曲している。

C類（第22図6～17）

回転台で成形され、底部に糸切り離し痕を残す。大形のC1類(6～8)、C2類(9～12)、C3類(13～17)に細分されるが、いずれも強いヨコナデ痕を残す。C1類の胎土は赤褐色で細粒子を含む。C2類の胎土はやや粉質、C3類は粉質である。

D類（第22図18～第23図103）

本遺跡で最も出土数が多く、主体となるものである。中形のD2類(18～50)、小形のD3類(51～103)がある。胎土はいずれも赤褐色の細粒子を含むものである。回転台で成形され、底部に糸切り離し痕を残す。体部がやや内湾する形態のもので、最も出土数が多い

	1	2	3
A			
B			
C			
			
D			
E			
F			
G			
H			

第21図 中世土師皿の分類

類である。D 3 類は体部の立ち上がり部分、および口縁部に強いヨコナデ二段が認められ、形態的特徴を形成している。しかしながら、形態的なバリエーションがあり、E 3 類と明確に分離できないものが若干認められる。

E 類 (第24図104~139)

中形の E 2 類 (104~121)、小形の E 3 類 (122~139) がある。胎土は赤褐色を呈し、細粒子を含む。回転台成形され、底部に糸切り離し痕跡を残す。底部から外反するように体部が立ち上がる類である。D 類に認められるような強い二段のヨコナデは認められず、体部は直線的な輪郭をもつ。

F 類 (第24図140~145)

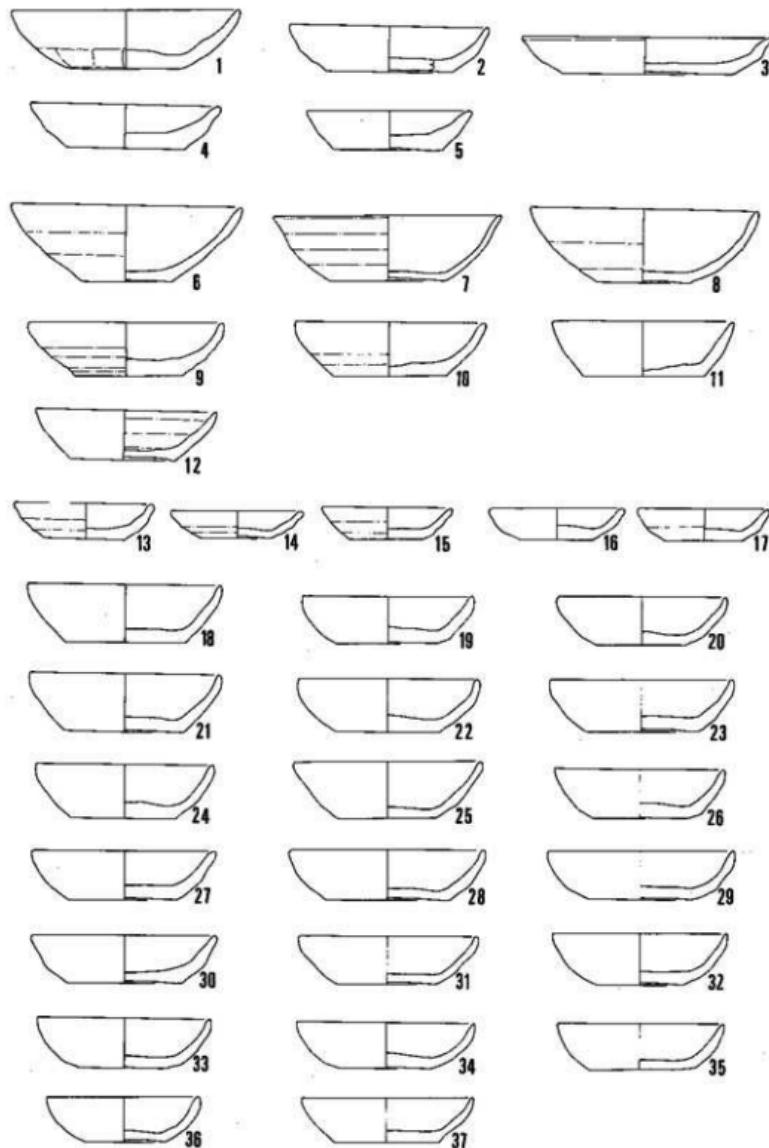
大形の F 1 類 (140・141・143)、中形の F 2 類 (142・144・145) がある。回転台成形され、底部に糸切り離し痕を残す。口縁部が外反する形態的特徴をもつ。

G 類 (第24図146~149、第25図150~153)

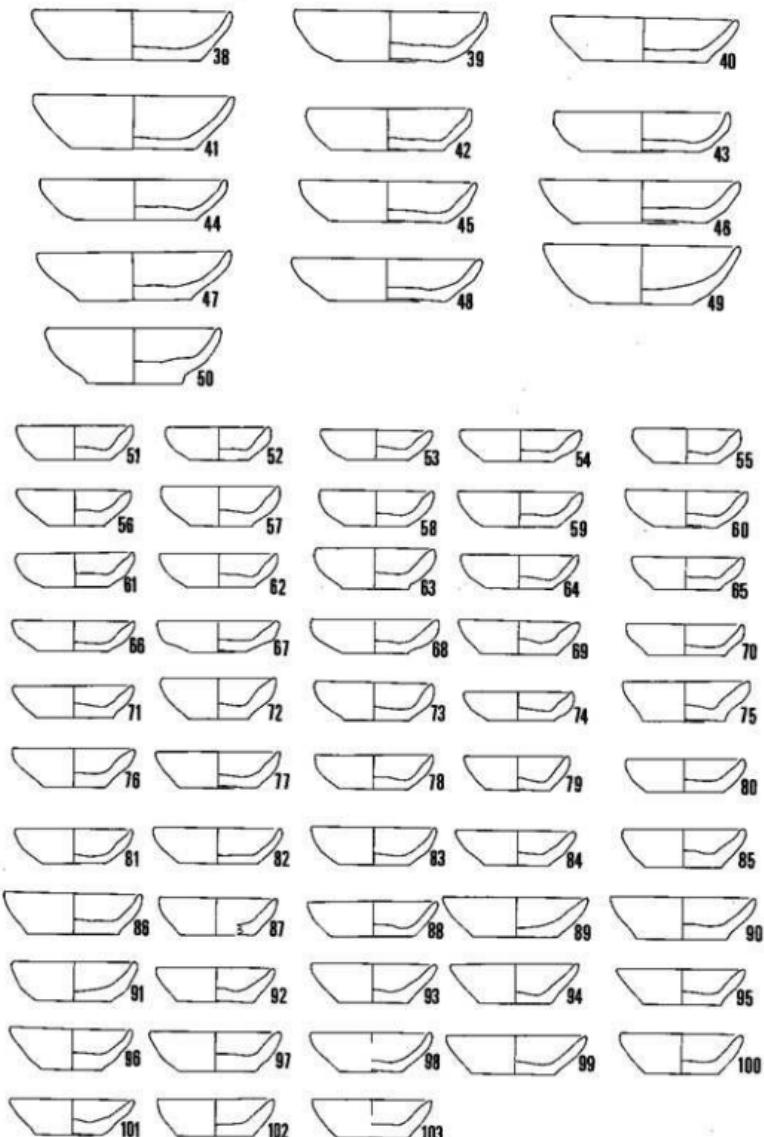
回転台成形され、底部に糸切り離し痕を残す。底部から急角度で直線的に立ち上がり、強いヨコナデ痕を内外面とも残す。胎土は赤褐色で細粒子を含む。やや赤味の強い色調をもつものが多い。

H 類 (第25図154~156)

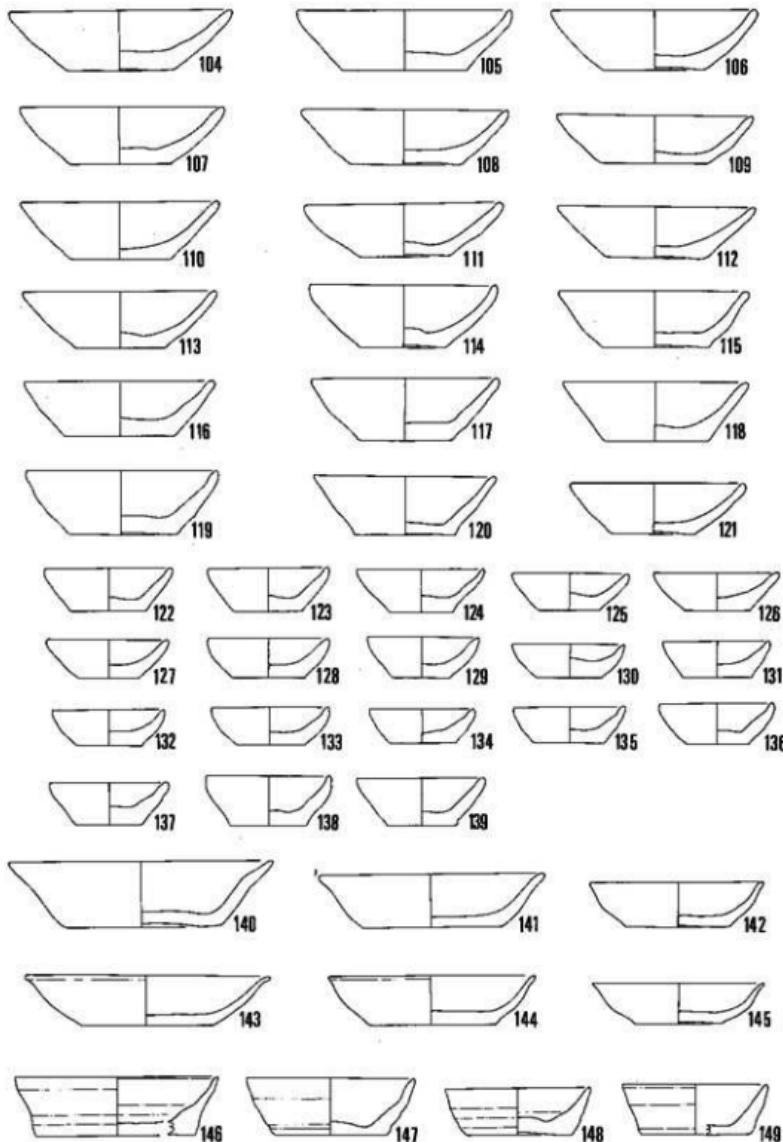
回転台成形され、底部に糸切り離し痕が残る。体部の立ち上がりが底径に比べて小さい



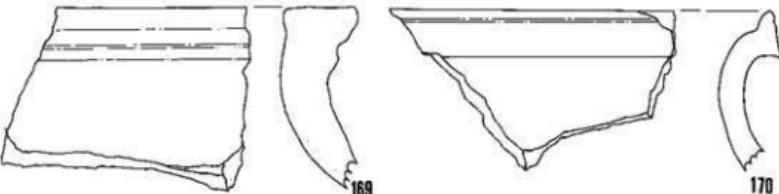
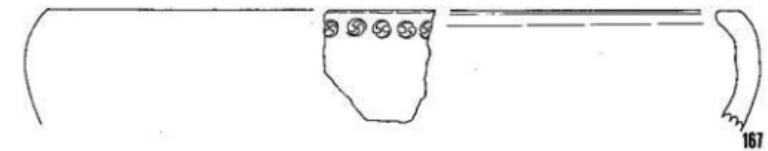
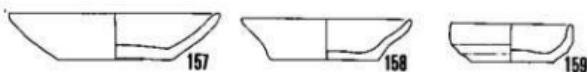
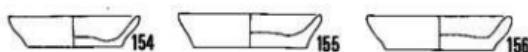
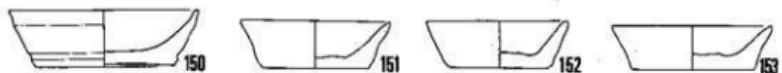
第22図 中世土師皿 1/3



第23図 中世土師皿 1/3



第24図 中世土師皿 1/3



第25図 中世土師皿等 1/3

形態的特徴がある類である。強いヨコナデが立ち上がり部に一段認められる。

その他（第25図157～162）

以上の分類にまとめることができないものを括した。157は底部よりE類のように直線的に立ち上がるが、外反の度合いが強い。158は口縁部が外反した後、内湾する。159は体部が強く内湾する。160はE類と形態的には同じであるが、底部穿孔である。161は口縁部が肥厚する。162は体部が底部から直線的に外反し、器壁が薄い。

(2) 土師質耳皿（第25図165）

底部に糸切り離し痕を残す。胎土は赤褐色。

(3) 土師質香炉形土器（第25図164）

土師質の香炉形土器である。胎土は白色で粉質である。口縁部は外反し、脚は三脚である。

(4) 瓦質土器（第25図163、166、167）

いずれも、火鉢と考えられる。

(5) 陶器（第25図169、170、第26図）

両例とも、越前焼きと考えられる。越前焼IVC期（16世紀中葉～後葉）に位置づけられる。第24図は越前焼胴部の刻印である。小野正敏氏のご教示によれば福井県一乗谷遺跡に7例、石川県戸水遺跡に類例が認められる。

(6) 珠洲焼（第25図171）

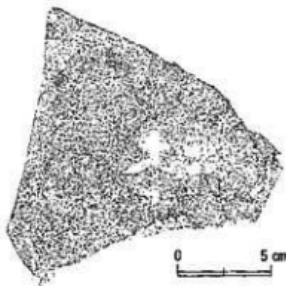
吉岡編年第IV期（14世紀後半～15世紀）に位置づけられるものと考える。珠洲焼のかめ形土器の出土数は少ない。

(7) 摺鉢（第26図172、173）

口縁端部が水平でやや凹状になるもの（172）と折り返しになるもの（173）がある。破片としてはまだいくつか認められるが数量は少ない。

(8) 輸入磁器

輸入陶磁器として青華、青磁がある。



第26図 越前焼胴部の刻印

2. 金属製品

金属製品には釘、佐波理桙、飾り金具がある。

(1) 釘 (第27図)

頭部が逆L字状を呈し、断面四角形である。

(2) 佐波理桙

器高約6cm、口径約20cmを計測する。

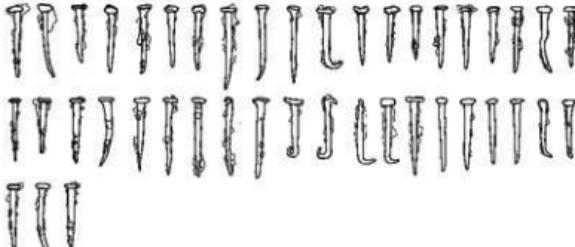
(中島庄一)

(3) 錢貨 (第28~30図)

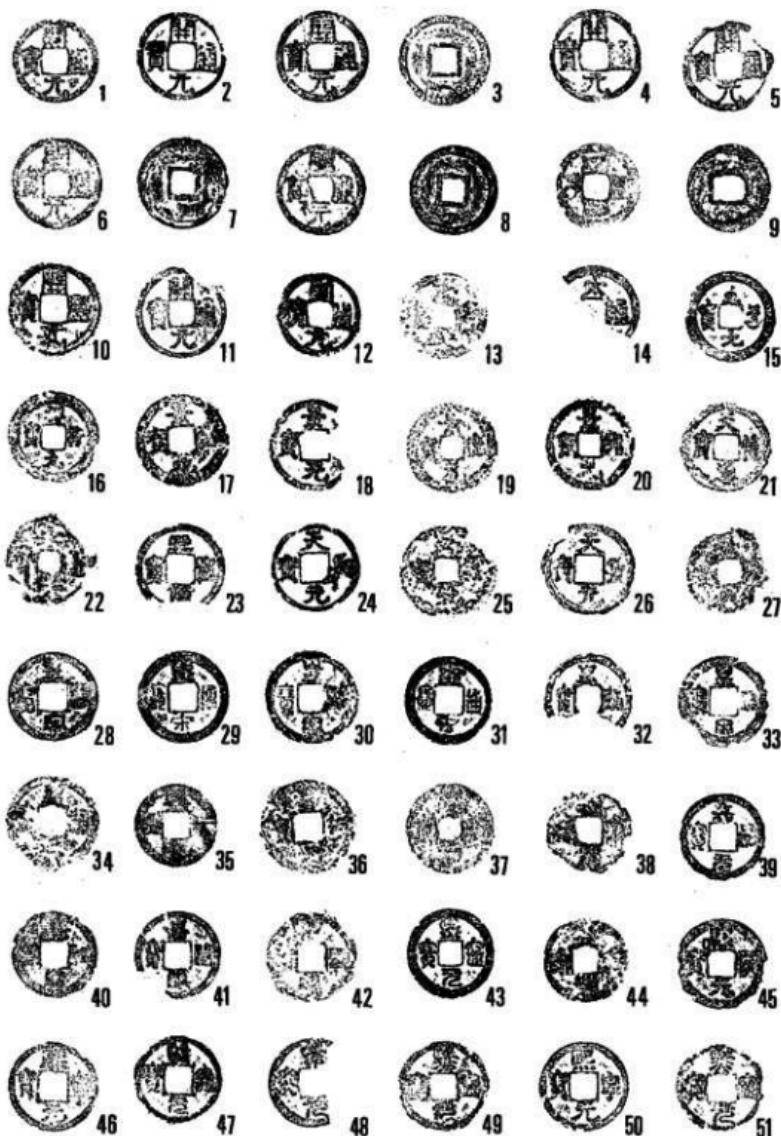
錢貨は178点を数える。その内訳は、開元通寶12枚（7世紀代初鋤）、宋元通寶3枚・至道元寶1枚・太平通寶2枚（10世紀代初鋤）、景德元寶2枚・祥符元寶1枚・祥符通寶1枚・祥符元寶もしくは祥符通寶3枚・天禧通寶2枚・天聖元寶6枚・景祐元寶2枚・皇宋通寶8枚・至和元寶1枚・嘉祐通寶3枚・嘉祐元寶3枚・治平通寶または治平元寶1枚・熙寧元寶12枚・元豐通寶12枚・元祐通寶6枚・紹聖元寶6枚・元符通寶4枚（11世紀代初鋤）、聖宋元寶3枚・大觀通寶1枚・政和通寶5枚・宣和元寶1枚・淳熙元寶1枚（12世紀代初鋤）、嘉定通寶か1枚・皇宋元寶1枚（13世紀代初鋤）、至大通寶1枚・洪武通寶6枚（14世紀代初鋤）、永樂通寶21枚・宣德通寶1枚（15世紀代初鋤）、時期不明であるが中世のものと確認できる錢貨として、無文錢1枚、破損により特定不能であるが、渡来錢であることが字体などから確認できる錢貨は44枚である。唐錢17枚・北宋錢85枚・南宋錢3枚・元錢1枚・明錢28枚・時代不明44枚となっている。

錢貨の出土グリッドを塗りつぶすと第31図のようになる。錢貨の多くは、東側中央付近の建物址の周囲と土壘の内側の裾部分に集中している。地鎮の遺構が確認されていないことから、出土錢貨の大半は遺失錢であろう。

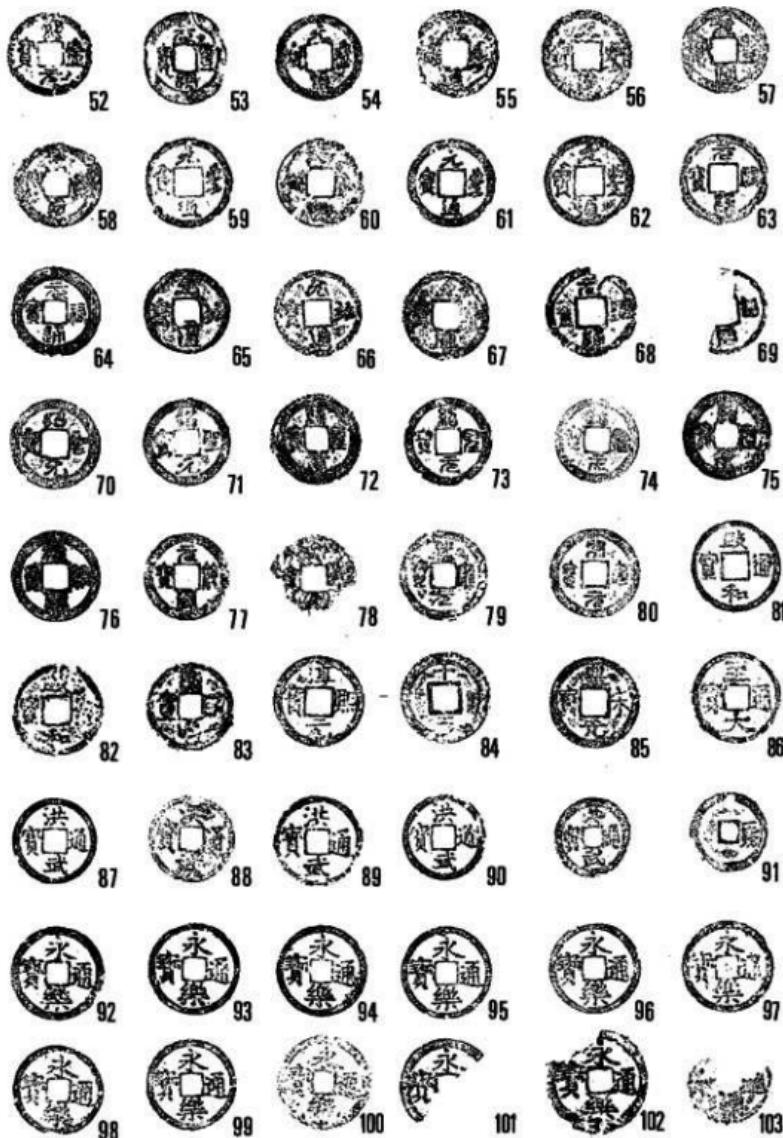
居館跡の溝からは6枚の錢貨が出土している。土壘お1より堀内からは、11枚の錢貨が確認されている。そのほとんどが土壘の裾をかためている石積みを検出する際に、崩落土



第27図 釘 1/3



第28圖 錢 貨 1/3



第29回 錢 貨 1/3



104



105

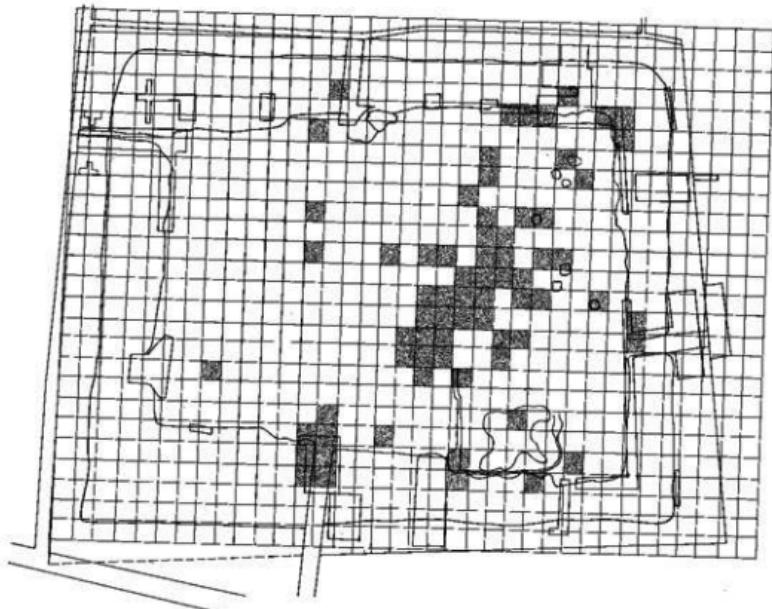


106



107

第30回 錢貨 1/3



第31回 錢貨出土位置

と思われる土層の直下から確認されている。また、築地壠の基盤層内から景德元寶・嘉祐元寶・嘉祐通寶・熙寧元寶・紹聖元寶各1の5枚の銭貨が確認されている。

第2号土坑内からは、□□元寶と判読できる篆書体の銭貨が1枚確認されている。本邦銭には篆書体の銭貨はないので渡来銭と考えるのが妥当であろう。第1号土坑内からは、118枚の銭貨が確認されている。最新の銭貨は永楽通寶である。同時に、多量の金属片、金属塊が確認されている。それらは綠青と思われる錫におおわれ、銅質の金属と考えられる。また、銭貨の90%以上が二次的な加熱を受けており、なかには5~10枚の銭貨が束ねられた状態で融着しているものもある。周辺には、多量のスサを含む、焼けた粘土塊が確認され、それらの表面にはガラス質化したものや、綠青様の錫の確認できる金属が付着したものがある。焼けた多量のスサ入り粘土塊はおそらく炉体の一部ではないかと考えられ、銭貨を銅の原材料とした鍛冶跡ではないかと考えられる。

(藤沢高広)

高梨居館跡出土銭貨一覧表(1)

拓本	出土遺構	グリッド	銭貨名	背文	初鑄年	備考	書体
1	北土塁南側		開元通寶		0621		隸書
2		C R18	開元通寶		0621		隸書
3		B L5	開元通寶	背上 月文	0621		隸書
4		B J12	開元通寶		0621		隸書
5	1号土坑	B J3	開元通寶	背上 月文	0621	外輪部やや欠損	隸書
7		B K7	開元通寶	背上に月文	0621		隸書
8		B K7	開元通寶		0621		隸書
9		B J12	開元通寶	背上 月文	0621		隸書
10	溝	B10	開元通寶	背上 月文	0621	34に鈕着	隸書
11	-	B J7	開元通寶		0621	外輪一部やや欠損	隸書
12	溝	B J7	開元通寶		0621		隸書
13		BM9	宋元通寶		0960	全体的にややゆがむ	隸書
14	1号土坑	B J3	太□通□		0976	1/2欠損	隸書
15	5号穀物址	B I 9,10	至道元寶		0995		草書
16	1号土坑	B J3	祥符元寶		1008		真書
17		B I 9	景德元寶		1034		真書
18		B L5	景祐元寶			1/3欠損	真書
19	榮地塚		景德元寶		1004	表面の薙食やや激しい	真書
20		B L5	景德元寶		1004		真書
21	1号土坑	B J3	天禧通寶		1017		真書
22		B I 9	天禧通寶		1017	外輪部の欠損激しい	真書
23			天聖元寶		1023		篆書
24		BM	天聖元寶		1023	背面に鈕損じの傷有	真書
25	1号土坑	B J3	天聖元寶		1023		真書
26	1号土坑	B J3	天聖元寶		1023		真書
27	1号土坑	B J3	景祐元寶		1034		真書
29	北東土塁内側石積	B	皇宋通寶		1039		隸書
30	1号土坑	B J3	皇宋通寶		1039		篆書
31		B K10	皇宋通寶		1039		隸書
32	北西土塁東方断面		皇□通寶		1039		篆書
33		A F12	皇宋通寶		1039		篆書
34	1号土坑	B J3	皇宋通寶		1039		篆書
35		B J10	皇宋通寶		1039		真書
36	北東土塁内側石積	B	皇宋通寶		1039		真書
36	榮地塚		嘉祐元寶		1056	表面の薙食激しい	真書
37	溝	A H11	至和元寶		1054		真書

高梨居館跡出土銭貨一覧表(2)

拓本	出土遺構	グリッド	銭貨名	背文	初鑄年	備考	書体
38		B K7	嘉祐元寶		1056		篆書
39		B K7	嘉祐元寶		1056		篆書
40		B N9	嘉祐通寶		1056		真書
41	基壇場		嘉祐通寶		1056	外輪部の一部欠損	篆書
42	集石		嘉祐通寶		1056		真書
43		B T5	熙寧元寶		1068		篆書
44		A H11	熙寧元寶		1068		真書
45	築地塲		熙寧元寶		1068	外輪部やや欠損	真書
46		B J6	熙寧元寶		1068		真書
47	1号庭園址	AA10	熙寧元寶		1068		篆書
48	6号石積竪穴	B P4	熙寧元寶		1068	1/3欠損	篆書
49	集石北	D	熙寧元寶		1068		篆書
50		C N18	熙寧元寶		1068		真書
51	北土塁		熙寧元寶		1068	外輪部の腐食激しい	篆書
52		C 14	熙寧元寶		1068		篆書
53	1号土坑	B J3	太平通寶		0976	元豐通寶(篆書)と融着	隸書
54	1号土坑	B J3	元豐通寶		1078		行書
55		B M8	元豐通寶		1078	外輪部やや欠損	行書
56	北東土塁角石積		元豐通寶		1078		行書
57		B J7	元豐通寶		1078		篆書
58		A G8, A H8	元豐通寶		1078		篆書
59		A F10	元豐通寶		1078		行書
60		B K9	元豐通寶		1078		行書
61		B L5	元豐通寶		1078		行書
62	南北溝内	B	元豐通寶		1078		行書
63	1号土坑	B J3	元祐通寶		1086		篆書
64		B J9	元祐通寶		1086		篆書
65		B L8	元祐通寶		1086		行書
66		B	元祐通寶		1086		真書
67	1号土坑	B J3	元祐通寶		1086		真書
68	1号土坑	B J3	元祐通寶		1086		篆書
70		B L5	紹聖元寶		1094		真書
71	北東土塁内側石積	B	紹聖元寶		1094		行書
72	1号土坑	B J3	紹聖元寶		1094		篆書
73		B K8	紹聖元寶		1094		篆書
74	2号庭園址		紹聖元寶		1094	やや歪む	篆書

高梨居館跡出土銭貨一覧表(3)

拓本	出 土 遺 構	グ リ ッ ド	銭 貨 名	背 文	初 銄 年	備 考	書 体
75	1号土坑	B J3	紹熙元寶		1094		篆 書
76			元符通寶		1098		篆 書
77		D C14	元符通寶		1098		篆 書
78		B Q5	聖宋元寶		1101	外輪1/2欠損	行 書
79	溝	B 10	聖宋元寶		1101	35に銘記	篆 書
80		B Q9	聖宋元寶		1101		篆 書
81		B K7	政和通寶		1111		隸 書
82	1号土坑	B J3	政和通寶		1111	他1枚融着	隸 書
83	1号土坑	B J3	宣和通寶		1119		篆 書
84		B N9	淳熙元寶	十五	1174		真 書
85		B	皇宋元寶		1253		真 書
86			至大通寶		1310		真 書
87		B J9	洪武通寶		1368		真 書
88		B L11	洪武通寶		1368		真 書
89	1号庭園址	A D7(2)	洪武通寶		1368		真 書
90		B L5,6	洪武通寶	背「上浙」	1368		真 書
91	北東土塁スゾ	B	洪武通寶	背「有 一錢」	1368		真 書
92	南北溝内	B I11	永樂通寶		1408		真 書
93		B L5	永樂通寶		1408		真 書
94		D F23	永樂通寶		1408		真 書
95		A G11	永樂通寶		1408		真 書
96		B P9	永樂通寶		1408		真 書
97		B J11	永樂通寶		1408		真 書
98		A H7	永樂通寶		1408		真 書
99			永樂通寶		1408		真 書
100		B O10	永樂通寶		1408		真 書
101	1号土坑	B J3	永□口寶		1408	1/2欠損	真 書
102	1号土坑	B J3	永樂通寶		1408	元祐通寶(篆書)と融着	真 書
103		B K10	□樂通寶		1408	1/2欠損	真 書
104		C L18	永樂通寶		1408		真 書
105		C L14	永樂通寶		1408		真 書
106	5号建物址	B K10	宣德通寶		1433		真 書
107		B L12	無文錢				

第5章 成果と課題

第1節 遺構

1. 土 墓

現況の高梨氏館跡は土壘・堀によって区画され、不整形な台形を呈している。しかし、土壘調査の成果を検討すると、台形は二つの方形区画が合成された結果であることが考えられる。これは以下のような理由による。

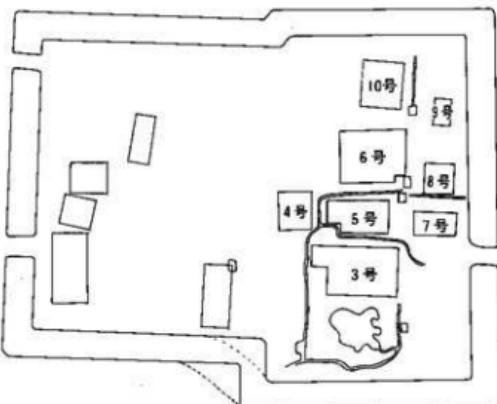
従前から、南側土壘の鍵の手状の屈曲は注意されていたが、ここを手がかりに、土壘内側の石積の下端部のつくる線を結ぶと、方位と大きさの異なる二つの方形区画が西半分と東半分に存在し、それが合成されて変形な台形を構成していることが明らかになる。今、便宜的に西側の方形を西区画、東側のそれを東区画と呼ぶことにする。

これに符合して、西区画部分と東区画部分の土壘にも違いが認められる。西区画部分の土壘には、現況の土壘下に古い土壘状の遺構が確認される。一方、東区画部分にはそうした痕跡は認められない。西側土壘の調査が未了で若干の不安はあるが、現況の台形区画は、当初存在した西区画部分に東区画部分が拡張付加された結果と考えることができ、古い土壘状遺構は西区画部分を画していたものと考えられる。

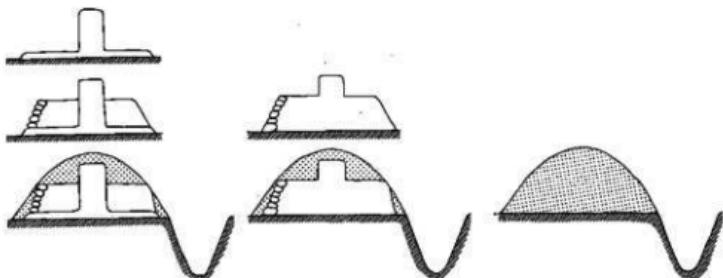
このように考えると、南側土壘内に残されていた築地塀が問題となる。この部分の土壘には三回の改修の痕跡が認められる。まず、築地塀が構築され、次にその両側に土が盛られ土壘状の遺構が付加される。

この時、土砂は築地塀の頂部まで積み上げられず、築地塀の頭部が突出した形態を呈す。そして、さらにこの土壘状の遺構を覆って現況の土壘が構築されている。築地塀は、西区画部分が全体に土壘状遺構で区画される段階以前のものと考えざるを得ない（第33図）。

しかし、居館の土壘が直線的でなく、屈曲した事例も多い。それゆえ、東と西の土壘の方向がわずかにずれるからといって、それが二つの区画



第32図 建物配置図



第33図 土塁断面模式図

の合成されたものと考えるのは早計であるかもしれないが、本事例では土塁の構造に着目し、西区画と東区画の両区画が合成されたのではないかと考えたい。土塁の全面調査がなされていない現時点では断定することはできない。

2. 小 口

調査時、小口は西土塁2ヶ所、南土塁2ヶ所、東土塁1ヶ所の合計5ヶ所が想定されたが、子細に検討すると西土塁2ヶ所、東土塁1ヶ所の合計3箇所に限定される。南土塁西側に偏って位置する現在の小口は、トレンチ調査をした結果、小口と考えられる遺構は確認されなかった。また、南側土塁の屈曲部に想定された小口は、小口内側の壁に見られる土止め用の石積と似た石積が西側の一方に確認されたが、小口と断定できなかった。むしろ西区画に関連するものではないかと考える。

西側土塁の二つの小口のうち、一方は北に偏し、他方は中央よりやや南に偏した位置に確認されている。西土塁北側の小口は調査前においても入り口として利用されており、土橋が存在していた。一方、南に偏した小口は土塁の稜線に窪みが認められたことから確認されたものであり、調査前においては埋没していた。東側土塁の小口は中央よりやや南に偏した位置にあり、西側土塁南の小口とほぼ一直線で東西に並ぶ。調査前においても土橋が存在し、明らかに小口とわかっていた。こうした状況から、館の最終段階まで利用されていた小口は西土塁北小口と東土塁小口であったと考えられる。

ところで、西土塁北側小口では土塁内側の南隅から連続する土塁内側裾部の石積とは別に、小口内側北隅から南に延びる石列が遺構検出面に認められる。この石列は小口北側の土塁裾部の石列の方向とほぼ一致して南に延び、小口の開口部を横切り、そのまま延長すると西土塁南小口の北隅に至る。じつは、古い段階とされる館の西区画を考えると、検出した土塁裾部の石積は直線的に成らず、困惑したのであるが、この石列の方向を加味すると直線的な西土塁が想定でき、さらに北土塁とも直交するのである。また、西土塁北小口の内側隅の遺構検出面が段違いになっている理由も説明できると思われる。

すなわち、西区画が構築された際に造られたのは西土塁南小口である。西土塁北小口は西区画が完成した後に、一部土塁も含めて改修され、新たにつけ加えられた可能性を考えられる。しかし、西土塁北小口の新設が東区画が拡張付加される以前の段階なのか、以後の段階なのかは明らかにすることができなかった。

3. 建物址

合計12棟の建物址と6箇所の柱穴群を検出している。建物址かどうか断定できない柱穴群を除くと、大半の建物址は東区画に集中し、その一番南の部分に庭園址が配されている。一方、西区画では建物址の検出は少ないが、下層により古い時期の遺構面が存在している可能性が高い。第2号庭園址などにその片鱗を見ることができる。

第32図にみるように3・4・5・6号建物址（A群）の軸線は、東土塁に併行し、北から西に約5度程ずれている。一方、1・7・8・9・10号建物址（B群）はほぼ真北を向いている。両者は建物の軸線がややずれることから、建築時期がやや異なると考えられるが、ほぼ同時期に併存使用されていたと考えられよう。また、庭園址は3号建物址と境界を共有することから、建物址と同時期と考えている。

A群建物址は互いに隣接して南北に配され、規模も大きく、A群の最も南に位置する3号建物址は庭園に接するなど居住空間や接客空間、7・8・9号建物址は同範囲に確認された大量の焼米などから、貯蔵空間の機能と考えることができるかもしれない。

第2節 出土遺物について

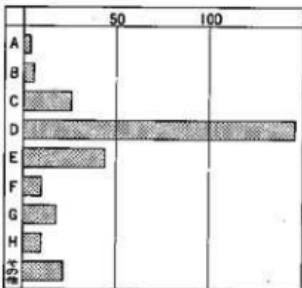
1. 中世土師皿

(1) 分類

中世土師皿は先述したように、形態上の特徴からA類～H類まで8類に分類した。また、各類はその大きさによって大中小に分類した。

形態の分類可能な個体数は全部で217個体ある。その内訳はA類が2個体、B類が3個体、C類が13個体、D類が123個体、E類が47個体、F類が5個体、G類が9個体、H類が5個体、その他が22個体となる。D類が最も多く全体の56%を占め、次に多いのがE類で、全体の22%を占めている。D類とE類で全体の80%を占め、本館跡出土の中世土師皿の主体をなしている。

各類の大形の口径の平均はいずれも12cm以上あり、中形は9～10cm、小形は7cm内外となっている。



第34図 各類の個数

	口径	器高
	15cm	5 cm
A1	■■■■■	■■■■■
B1	■■■■■	■■■■■
C1	■■■■■	■■■■■
F1	■■■■■	■■■■■
A2	■■■■■	■■■■■
B2	■■■■■	■■■■■
C2	■■■■■	■■■■■
D2	■■■■■	■■■■■
E2	■■■■■	■■■■■
G2	■■■■■	■■■■■
H2	■■■■■	■■■■■
C3	■■■■■	■■■■■
D3	■■■■■	■■■■■
E3	■■■■■	■■■■■

第35図 各類の法量

(2) 胎 土

胎土にはおおむね粉質で色調がやや白みがかるものと、細かい粒子を含みやや荒めで褐色味の強いものに大きく分けることができるが、その間に中間的なものもある。前者の粉質で白味の胎土を持つものにはA類・B類・C3類があり、後者のやや粗く褐色の胎土を持つものにはC1類・D類・E類・G類・F類・H類がある。C2類は中間的な様相をもつ。

粉質で白味の強い色調のものは、本館跡では出土量の少ない類に限られている。この類に含まれるA類は手づくねであり、白カワラケとされるものとよく似ている。B類は成形技法が確定できないが、手づくねの可能性が強く、やはり白カワラケと似ている。ただし、C3類は回転台を利用して成形されており、色調もやや黄色味が強く、A類、B類と分けて考えた方がよからう。A類・B類は量的に少なく、成形方法、胎土とも、出土量の多いD類・E類と異なることから、他地域から搬入されたか、あるいはそれに習って製作されたものと考えられよう。

ところで、在地製の中世土師皿に混じって、他所から搬入された中世土師皿が存在することは鎌倉でも確認されている。鎌倉では搬入された中世土師皿は京都系のもの（白カワラケ）であると考えられ、搬入された時期は14世紀代までとみられている。

本館跡出土のA類・B類が、鎌倉と同様に京都系の白カワラケとされるものであるかどうかは、筆者の力量では確認できない。文献史料によれば高梨氏は15世紀代から16世紀前半にかけて、京文化と積極的に接しており、こうした背景も十分に加味する必要があろう。

(3) 成 形

A類・B類を除いて、他の類はすべて回転台を利用して成形されている。底部には糸切り痕跡がいずれも残っている。また、大半の底部には板状圧痕が観察できる。さらに、見込み底部には、指によると思われる強いヨコナデが観察される。体部はヨコナデされているが、一段と二段のものがある。

(4) 底部円柱づくり

観察した中世土師皿の底部内面と外面両方に、糸切り痕跡が認められるものが一例ある。これは、福田健司氏が指摘した低部円柱づくりによって成形された痕跡と考えられる。

底部円柱づくりは10世紀後半以降の須恵器成形に認められる技法で、「I、粘土塊をロクロないし回転台の上にのせ杯の底部と同径の円柱をつくる。II、この円柱の上部に粘土紐を巻き上げ体部を形成する。III、ロクロないし回転台をナデを繰り返し器内を均等に調

整する。この時、内面をかなり丁寧にナデるために内面の糸切りはなし痕跡は消えてしまう。IV、このようにして、成形、整形した杯を糸によって円柱から切り離す」技法である（福田 1979）。

底部円柱づくりの確認できた例は一例のみであったが、おそらく回転台を利用する本館跡出土の中世土師皿はこの方法で製作されたと考えられる。本館跡出土の中世土師皿は14世紀代以降のものであり、10世紀からは相当時間が経過しているが、おそらく、古代に現れた須恵系土師器（ロクロ土師器）の成形技法の延長線上にあるのではあるまいか。県下では14世紀代を境に手づくね成形のものから回転台成形のものへ交代すると考えられている。回転台成形のものが、古代からの成形技法を踏襲しているとすれば、このような事象をどの様に理解すべきか、興味深い課題である。

(5) 中世土師皿の年代

中世土師皿は形態のうえから8類に分類できたが、これらは製作の地域差・製作者の違い、あるいは時間差を示していると考えることができよう。A類・B類は胎土・成形技法の違いなどから、地域差が大きく反映しているものと推測される。一方、その他の類は、一般的に中世土師皿が在地性のものであると考えられており、胎土もよく似ていることから、時期差を示していると考えることができよう。

しかしながら、調査ではこれらの時期差を知る手がかりは得られなかった。本遺跡から出土した陶器はわずかであるが、年代を知り得るものが二例ある。一方は珠洲焼のかめ形土器で14世紀後半（吉岡編年 第IV期）のものであり、他方は越前焼のかめ形土器で16世紀後半のものである。このような状況からみて、本館跡出土の中世土師皿も概ね14～16世紀という年代幅をもつものと思われる。

しかし、中世土師皿の地域編年が完成されていない現時点では、これ以上の細かい年代について言及することはできない。そこで、比較的資料の整っている他遺跡の出土資料との比較を通して、この点について若干の検討を加えてみたい。ただし、比較資料については、時間的余裕の無さや筆者の力量不足もあり、県下の管見にみられたものにしたい。

(6) 県下（千曲川水系）の中世土師皿の様相

①佐久市大井城跡では70点の中世土師皿が報告されている。これらは回転台を利用して成形され、体部に強いヨコナデ痕をもち、底部および底部からの立ち上がり部の器壁が厚く、口縁端部で急に薄くなる特徴をもっている。また、口縁部が外反するものと、わずかに外反傾向をもつものがある。報告者は前者をA類、後者をB類と呼称し、両類とも大・中・小に分類されると指摘している。形態的にも製作技法の上でも、本遺跡でF類・G類と分類したものに近似する。大井城跡ではこれらの土師皿に伴って、14～16世紀の陶器が出土しているが、土師皿と明確に伴出したものはなく、土師皿の細かい年代を決定するこ

とはできないとされる。しかし、鎌倉における服部編年第IV期の中世土師皿と形態上の特徴が一致するとして、16世紀代という年代を与えてている。

②長野市栗田城跡からも比較的多くの中世土師皿が報告されている。ここでは、手づくね成形によるものと回転台成形によるものとの二者があり、圧倒的に回転台成形によるものが多い。回転台成形のものは形態的に二類に分けられる。一方は、底部から外反しながら直線的に体部が立ち上がり、底部からの立ち上がり部分に強いヨコナデが一段認められるものである。他方は、底部からやや内湾気味に体部が立ち上がり、立ち上がり部と口縁部に強いヨコナデが認められるものである。両者とも大・中・小に分類される。こうした形態、成形技法のあり方から、前者は本館跡資料のH類、後者はD類に相当するものと考えられる。この例でも明確な年代は明らかにされなかったが、伴出したその他の資料から、14~15世紀前半の年代が考えられている。

③下諏訪町殿村・東照寺址遺跡では、約40点ほどの中世土師皿が報告されている。A類~E類に分類され、A類は手づくね成形によるもの、B類は底部に糸切り痕を残すものの、C類はろくろ成形によるが堅い焼成のもの、D類はいわゆる内折れかわらけ、E類は底部に穿孔されるものである。そして、手づくね成形によるA類は13世紀前半から後半、回転台成形のB類は13世紀末葉から14世紀代、回転台成形され堅く焼成されたC類は15世紀から16世紀の年代が与えられている。また、C類は北関東や福島県で出土している「ロクロ目が顯著に残る土師質土器」との関連性が指摘されている。このC類は本館跡のG類との類似性が考えられる。

(7) 変遷段階

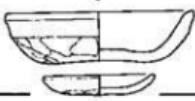
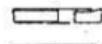
以上、量的に少なく、決して十分とは思えないが、これらの資料からある程度の長野県における中世土師皿の変遷過程を知ることができよう。そこで、これらの資料を用いて長野県（選択した資料が千曲川沿岸に偏っているが）の中世土師皿の変遷を考えてみたい。

まず、13世紀代の資料には殿村・東照寺遺跡第I期前半の資料があてられる。やや内湾する体部をもち、手づくね成形されるものである。

14世紀代に限定される資料は殿村・東照寺遺跡第I期後半の資料である。体部が低く、回転台成形される一群で、いわゆる盤状かわらけとされるものである。

ところで、栗田城跡出土資料は14世紀末から15世紀の年代が与えられるものと考えられている。この一群には、(a)手づくね成形されるもの、(b)回転台成形され器高が低く一段の強いヨコナデのもの、(c)回転成形され、やや内湾した体部をもち二段の強いヨコナデが観察されるものがある。

14世紀代に比定される殿村・東照寺遺跡第I期後半の資料と、栗田城跡の資料を比較すると、(b)としたものが、形態上の殿村・東照寺遺跡第I期後半の資料と類似しているが、器高が高くなってしまい、それよりは新しいものと考えられよう。また、(c)としたものは、

			13世紀
			14世紀
			15世紀
		16世紀	
殿村・東照寺遺跡		栗田城跡	
			大井城跡

第36図 中世土師皿の変遷

殿村・東照寺遺跡には認められず、おそらくこの時期より、新しい時期に出現するものと考えられる。そこで(c)は、14世紀代でも新しい時期から15世紀代と考える必要があろう。また、栗田城跡では、(b)としたものの中にも、やや器高が高いものがあるが、新しい(c)としたものと関連させて考えれば、やや後出的な要素が加わっているからと考えられる。

15世紀代に限定される資料はないが、栗田城跡出土資料のなかで、新しいと考えた一群、回転台成形され、底部からやや内湾気味に立ち上がり、体部の立ち上がり部と口縁部に強いヨコナデ痕を残すもの、すなわち、(c)としたものに相当すると考えられる。

殿村・東照寺遺跡第II群の資料は、15世紀から16世紀の年代が与えられているが、こうした形態は、15世紀代までと考えられている栗田城跡出土資料中には認められず、16世紀代に比定される大井城跡出土資料との類似性が強く、16世紀代の可能性も考えられよう。

16世紀代に比定されるのは、大井城跡出土資料であろう。回転台成形され、体部に強いヨコナデ痕を残し、底部と立ち上がり部の器壁が厚く、口縁部で薄くなる一群である。

(9) 編年と各類

長野県（千曲川水系）の中世土師皿は、以上、概観したような変遷過程を遂げたものと思われる。これら各時期の中世土師皿と本館蔵の中世土師皿の各類を比較すると、それぞれが各期の中世土師皿と類似性をもっていることが明らかになる。

第I期：13世紀代

本館跡では出土していない。

第II期：14世紀代

本館跡のH類（器高が低く、立上がり部に一段のヨコナデが認められる類）がこの段階に相当するものと考えられる。

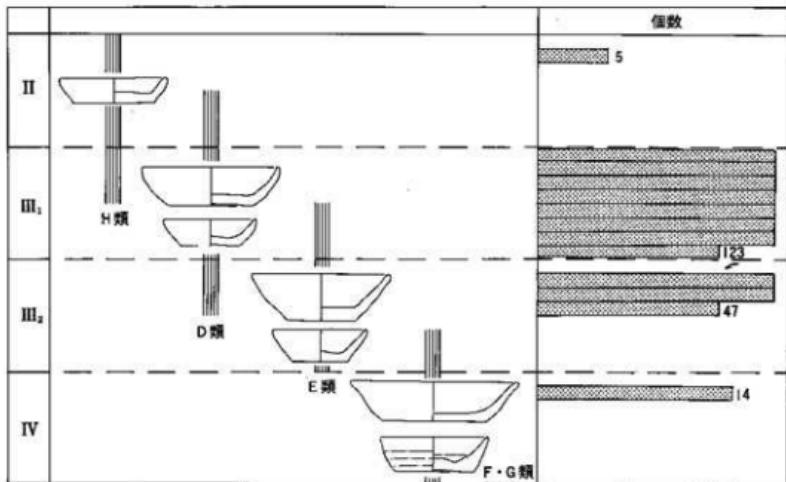
殿村・東照寺第I期後半の資料、長野市栗田城跡出土資料(b)類の段階である。二遺跡の資料を比較すると、前者は器高が低く、後者はやや器高が高い。おそらく、新しくなるにしたがって、中世土師皿の器高は高くなるものと推測されることは先述したが、本館跡のH類はやや器高が高い栗田城跡(b)類に、より類似する。したがって、14世紀代でも、より新しい段階に位置づけられるものと考えられる。出土量は少ない。

第III期：15世紀代

本館跡出土のD類・E類が相当すると考える。D類はやや内湾しながら立ち上がり、二段のヨコナデをもつ類、E類は底部から体部が外反するように立ち上がり、D類のように明確なヨコナデの痕跡を残さない例である。

本館跡D類は栗田城跡(c)類と類似する。両者を比較すると、本館跡D類はやや器高が高い。両者の違いは地域差なのか、時間差によるものか、にわかに判断できないが、中世土師皿の器高が新しくなるにつれ高くなる傾向があり、時間差が原因ではないかと考える。

一方、本館跡出土のE類の類例を探すことができなかった。E類は体部が直線的に外反することや二段のヨコナデが認められないことなど、形態的には栗田城跡(c)類や本館跡D類と大井城跡出土資料との中間的な様相を持っていると考えられ、本館跡D類よりも新し



第37図 高梨氏館跡出土の中世土師皿の変遷

く、大井城跡資料より古い段階のものと考えておきたい。

第IV期：16世紀代

本館跡G類・F類が相当すると考える。両類とも強いヨコナデが施され、あたかもロクロ目のような痕跡を有すること、体部立上がり部や底部の器壁が厚いことなど多くの類似点をもつ。

以上のように、本館跡出土の中世土師皿の各類は、14世紀代から16世紀代にかけてのものであると考えられる。量的にはD類・E類が出土量の80%を占めており、15世紀代の中世土師皿が圧倒的多いということができる。

なお、A類・B類・C類の類例を得ることができなかつた。今後の課題としたい。

(中島庄一)

第6章 ま と め

調査成果について簡単にまとめておきたい。

戦国時代には、戦国大名クラスの武将が、(1)城郭とは別に居館を構えたものと、(2)城郭を構えるだけの力をもたない武将が防御と生活の場を兼ね備えた居館を構える場合の二者がある（河原、1990）。一乗谷朝倉館跡（福井県・東西100m、南北120m）、江馬氏の江馬下屋敷跡（岐阜県・東西100m、南北100m）が前者の代表的な例といえよう。

高梨氏館跡の背後には、山城である鴨ヶ嶽城が存在し、居館は東西約120m、南北約100mの規模をもつ。同時に、居館の周囲には東西約300m、南北400mの広い「館回り」を配して、外郭を形成している。居館の規模だけを比較すれば、かなり大きいものと評価して良いであろう。また、高梨氏館跡に戦国大名クラスの武将の居館に共通する苑池を中心とする庭園施設が存在していたことも特筆すべきである。まさに、高梨氏は戦国時代、北信濃最大級の領主であったとすることができよう。

また、出土遺物の検討から、高梨氏館跡は14世紀の比較的新しい時期から16世紀代にかけて存続していたと考えられる。本調査で確認した造構面の下層に、古い段階の造構が存在することが予測されるので、その成立期をにわかに断定できないが、本報告で推定した中世土師皿の編年が正しいとすれば、おそらく14世紀の後半には周囲を何らかの形で区画した館が成立していたものと考えられる。

さらに、土壘の調査所見等から、現況の土壘は西側部分が先行して造られ、後に東側部分が拡張附加された可能性が指摘される。とすれば、高梨氏館跡は、(1)築地塀が存在した段階、(2)西側区画の段階、(3)東側区画が拡張附加された段階と、大まかに三段階の変遷を遂げているものと考えることができる。各期の実年代については明らかにすることができなかつた。

ところで、文献資料によれば、高梨氏館跡の領主である高梨氏が中野地方を支配下におくのは、16世紀の初頭と考えられ、今回の調査で得られた結果とは若干異なる。おそらく、高梨氏館跡は14世紀の後半、高梨氏以外の領主によって造られ、後に高梨氏の所有となつたものであろう。

昭和62年度に開始され、平成4年度まで、延べ日数936日を費やした発掘調査は以上のような成果を得ることができた。いたらない点は多々あるものと思うが、新しい知見を得ることができたと自負している。特に、居館跡のほぼ全体を調査し、しかも、庭園址全体を発掘調査した事例は、そう多くないのではないか。

高梨氏館跡は全国的に見ても、保存状態の極めて良好な居館跡であったが、今後、今回の調査結果をふまえ、都市公園として整備され、調査した多くの貴重な遺構は保存され、後世に伝えられることになった。我々の調査が郷土の文化財の保存と活用の一助となれば幸いである。

また、この様な成果をあげることができたのも多くの市民、関係者各位のご協力の賜であることを明記し、厚く御礼申し上げたい。また、奈良国立文化財研究所宮本長二郎氏、田中哲雄氏、細見啓三氏、本中真氏には多くの御教授を頂いた。文末ながら心から御礼申し上げる次第である。

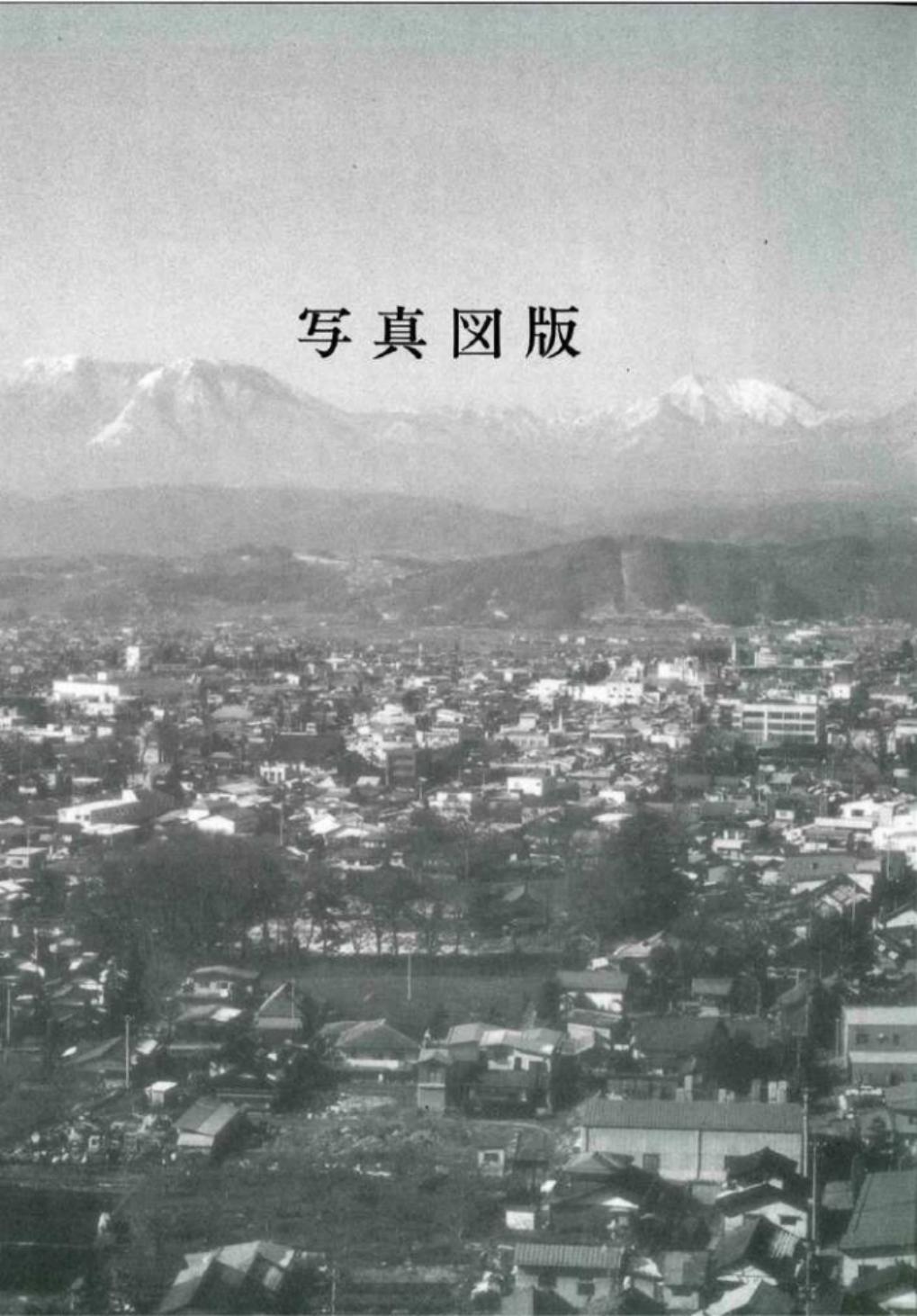
(金井汲次)

引用参考文献

- 阿部 定樹 1967 『高梨家古文書小書』墨禪会
石井 進 1993 「信濃の古代中世を考える」「下高井教育」第22号
市川 隆之 1989 「第7章第5節平安時代末期から鎌倉時代の土器皿」
「吉田川西遺跡」
一志 茂樹 1957 「城館址の形態とその歴史的考察」「信濃」III-9-10
1979~81
「小布施の古代をさぐる」「小布施町公民館報」164号~188号 長野県上高
井郡小布施町公民館
1980 「大彦命に出自をもつ古代阿部氏系布施・小布施・仁科・三氏の研究(+)」
「信濃」III-32-5
伊藤 富雄 1937·8 「中野五郎能成(1~7)市川文書之研究」「信濃」I-6-8~12、7
-2·3
井上 銳夫 1970 『新潟の歴史』山川出版社
河西 克造 1986 「中世城館址研究の方向性(地方史研究からの脱皮をめざして)」「信濃」
III-38-5

- 金井喜久一郎 1934 「高梨善応寺について」『信濃』 I-3-6
- 1975 「城館跡における諸問題（主として中世の歴史研究の場合）」『信濃』 III
-27-3・6
- 1979 「中野小館の高梨家」『高井』第47号 高井地方史研究会
- 栗原 英治 1932 「市川文書の郷土史的研究」『信濃』 I-1-8
- 郷道 哲章 1989 「城館跡の時代的変遷について（信濃の実例をもとに）」
『信濃』 III-41-11
- 1897 「小館館跡周辺考」『須高』第25号須高郷土史研究会
- 1991 「講演信濃の城館跡と下伊那の城館跡」『伊那』11月号
- 坂井 衡平 1969 「善光寺史」上・下
- 田中 哲雄 1990 「高梨氏館の庭園遺跡」『仏教芸術』192号
- 野村 一寿 1990 「第3章第3節中世土器・陶磁器」『勘長野県埋蔵文化財センター発掘調査
報告書4 中央道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4—松本市内その1
—』総論編
- 原 明芳 1991 「栗出城跡・遺物」『長野市の埋蔵文化財第38集栗田城跡・下字木遺跡・三
輪遺跡(3)』長野県長野市教育委員会
- 福田 健司・服部 敬史
- 1979 「南多摩窯址群出土の須恵器とその編年」『神奈川考古』第6号
- 宮坂 清 1990 「殿村・東照寺址遺跡の中世陶磁器・土器類について」
『殿村・東照寺址遺跡』長野県諏訪郡下諏訪町教育委員会
- 室伏 徹 1991 「高梨氏館跡の発掘調査によせて—15~16世紀の館跡星数の郭内施設配置
について—」『信濃』 III-43-11
- 湯本 軍一 1970 「信州における国人領主制の確立過程」『信濃』 III-22-11
- 1991 「信濃高梨氏城下の景観復原」「中世の村落と現代」石井進編 吉川弘文館
- 湯本 軍一・権原 長則
- 1990 「高梨氏とその館跡・城下」『日本歴史』第505号日本歴史学会編集
- 下高井郡役所 1922 「下高井郡誌」
- 中野町役場 1945 「中野町誌」
- 1955 「増補 中野町誌」
- 中野市役所 1981 「中野市誌」歴史編前編
- 長野県教委 1983 「長野県の中世城館」分布調査報告書
- 長野県 1987 「長野県史」通史編第3巻中世二

写真図版



図版 I



1 東山より居館跡を望む



2 調査前風景（現南通用口）

図版 2



3 調査前風景（居館内）



4 同 上



5 安全祈願祭



6 同 上



7 試験風景



8 同 上



9 試掘風景



10 テストピット 分層状況

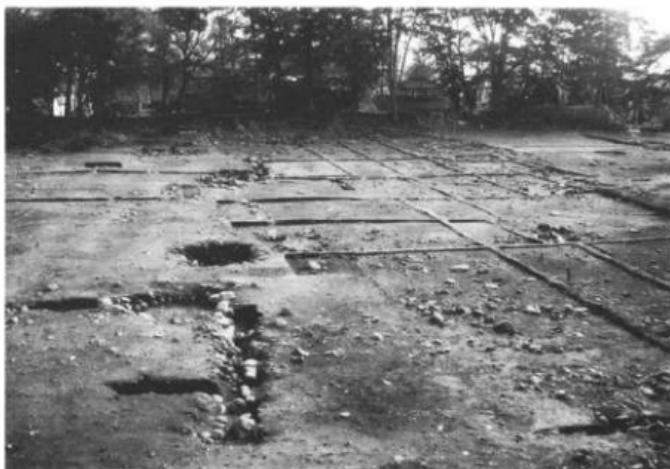
図版 6



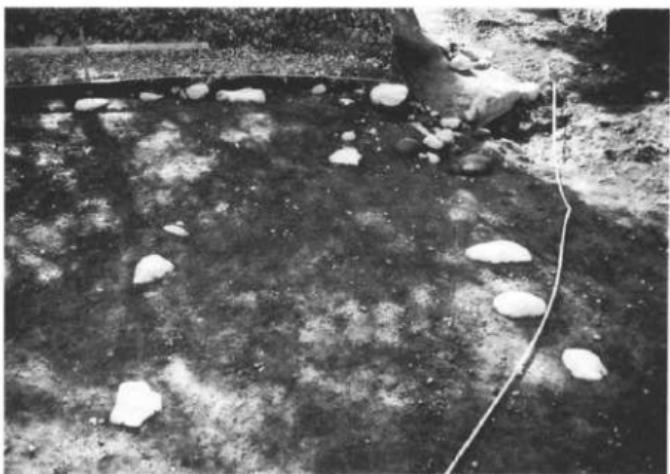
11 居館内（調査中）



12 同 上



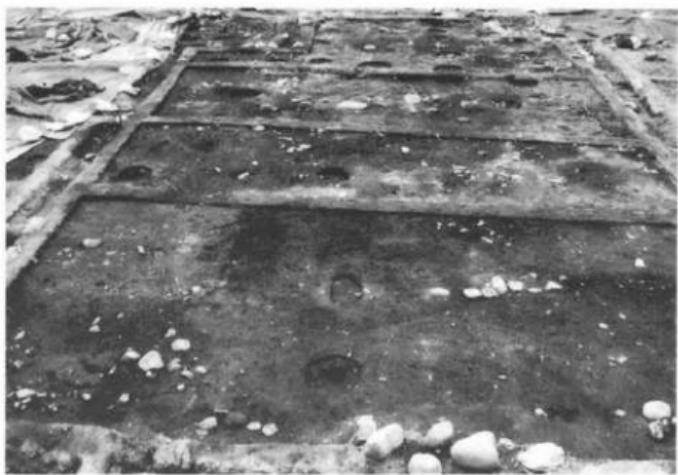
13 建物址群（北より南）



14 第1号建物址



15 第3号建物址



16 同 上



上：17 第4号建物址



中：18 同 上
(礎石列)

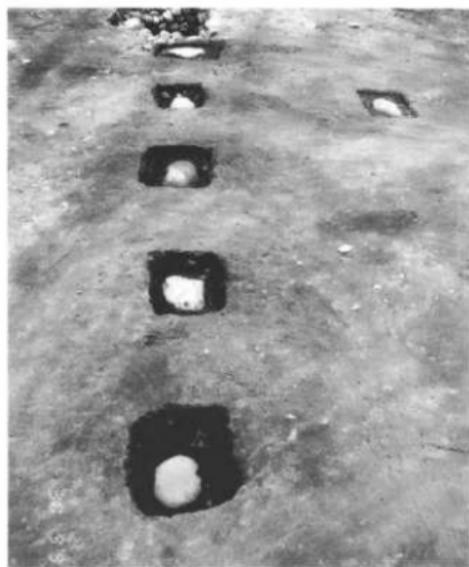
下：19 同 上
(雨落ち跡)



図版10



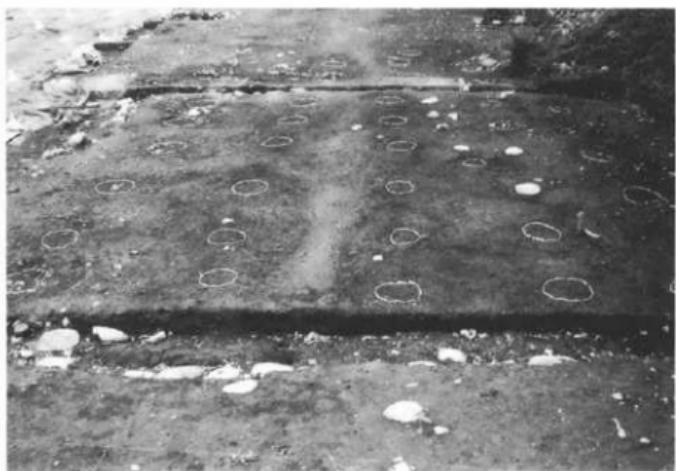
20 第5・6号建物址



21 第6号建物址礎石列



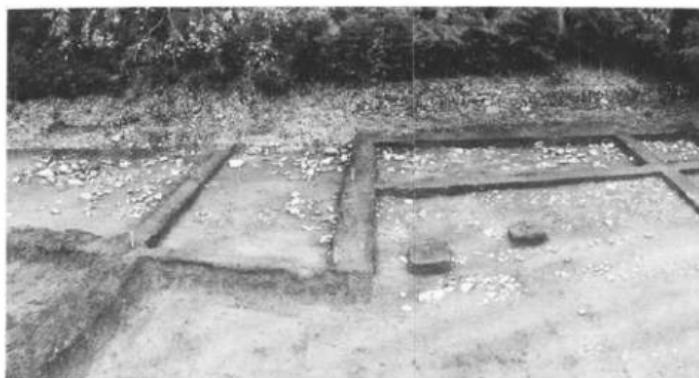
22 第7号建物址と焼土坑



23 第8号建物址



24 第2号建物址



25 同 上



26 第2号庭園址



27 第1号庭園址



28 同 上



29 庭園址（遺構確認時）



30 同 上



上：31 庭園並配石



中：32 庭園並異溝跡



下：33 同 上

図版16



上：34 庭園址(調査完了時)

中：35 同 上

下：36 同 上





37 庭園址（調査完了時）



38 同 上



39 西側土塁北小口（調査前）



40 同 上（表土除去時）



41 西側土塁北小口（調査完了時）



42 同 上（門跡礎石）



43 西側土塁北小口に通じる土橋と堀



44 西側土塁南小口



45 東側土壁小口（調査前）



46 同 上（調査完了時）



47 東側土壁小口に通じる土橋と堀



48 南側土塁小口（堀側より）



49 同 上（西側の石積み）



50 南側土塁小口脇の暗きよ施設



51 同 上

図版24





54 石積み方形竪穴



55 石積み方形竪穴



上：56 燐土坑



下：57 下層の遺構
(D地区)



上：58 現甫通用口土堤
東側（調査前）

中：59 同 上 内
(土堤断面)

下：60 同 上 内
(整地跡跡)

图版28



上：61
北侧土堤断面



中：62
同 上

下：63
同 上
(横断面)





64 北側土塁内の石積み横穴



65 同 上



66 東側土堤断面



67 北側土堤（調査前）



68 同 上（石積み造構）



上：69
東側土壁から北側土壁
にかけての石積み



中：70
東側土壁石積み

下：71
同 上





72 南側坂（調査前）



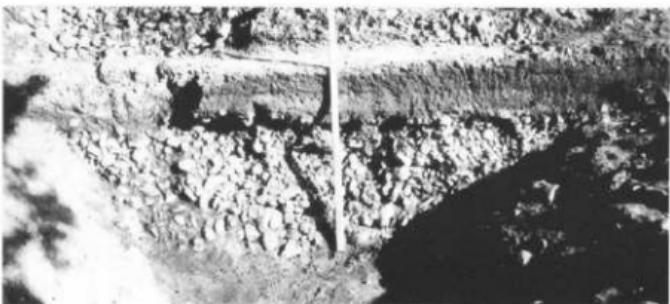
73 北側坂（調査前）



74 北側堤断面



75 東側堤断面



76 南側堤断面



77 中世土師皿の出土状況



78 同 上

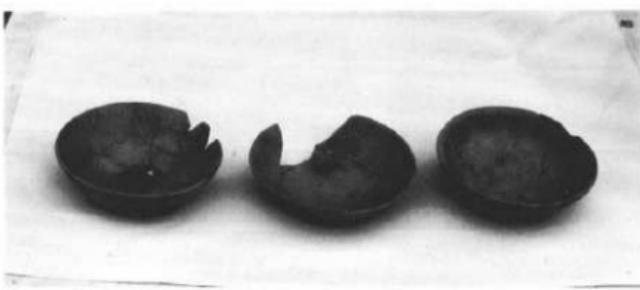


上：79
佐波理梅と杯
の出土状況



中：80
佐波理梅

下：81 土師杯

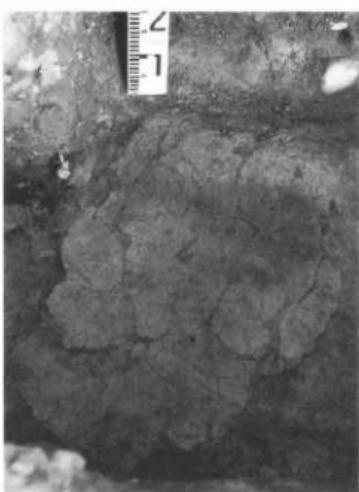


図版36

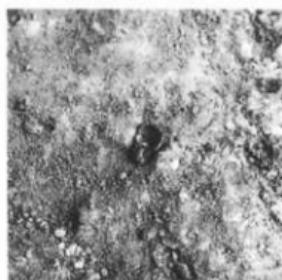
上：82
銅製釣針



下左：83
燒土坑內出土釣
針



下右：84
同上（出土壁土）



左：85 焼土坑内出土銅金具

右：86 同上（出土吊輪）



上：87

柱用された五輪塔



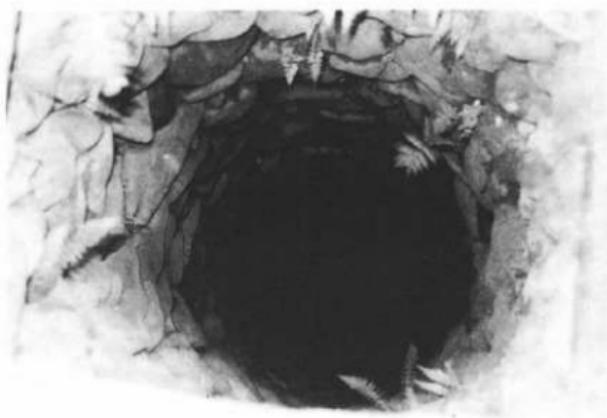
下：88

同上

(墨書有)



89 現井戸枡



90 同 上 (内石積み)



91 居館より鶴ヶ獄（山城）を望む



92 鶴ヶ獄山城の土壠跡



93 鶴ヶ城山城の櫻切り



94 同 上 (石積み)



上：95
高望政道の歌碑



下：96
居館内にたてられた福荷社と石碑



97 夏休みを利用して地元高校生の発掘調査体験



98 東町老人クラブの皆さんによる草刈りボランティア



99 文化2年、河原先生による調査指導風景



100 一部整備の完了した居館内

高梨氏館跡

—発掘調査報告書—

印刷日 平成5年3月16日

発行日 平成5年3月26日

編集行 中野市教育委員会
長野県中野市三好町1丁目3-19

印 刷 ほおづき書籍株式会社
